

一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書

林 遺 跡  
HAYASI

1990. 3

宮崎県教育委員会

一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書

林 遺 跡  
HAYASI

1990. 3

宮崎県教育委員会

## 序

宮崎県教育委員会では、建設省の委託を受けて、昭和61年度から一般国道土々呂バイパス建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を進めてまいりましたが、平成元年1月をもちまして無事終了することが出来、報告書を刊行するに至りました。

第1次調査では、水田面の調査を中心に実施しましたが、古く遡る水田の検出はみられず、伊形地区における塩水の影響などによる水田開発の困難さを知ることが出来ました。同時に旧石器の遺物が畑地において検出され、標高の低い場所での旧石器時代の追及に期待が持たれました。

第2次調査は、旧石器時代の追及と、畑地において確認されていました掘立柱建物跡の検出を中心に実施しました。その結果、古墳時代の遺物のほか掘立柱建物跡に伴うとみられる陶磁器片及び土師質土器と大規模な掘立柱建物跡の検出をみました。

第3次調査は、道路用地の未買収地の調査で、掘立柱建物跡の全容を明らかにすることが出来ました。

こうした成果を基に、県北の地域史が紐解かれると共に、これらの貴重な成果が学術関係者のみならず、社会教育・学校教育の分野にも広く活用され文化財保護行政推進の一助となることを期待します。

発掘調査にあたって深いご理解とご協力を示された建設省の関係各位と発掘調査に参加され、支えていただいた地元の方々に深甚の謝意を表します。

平成2年3月31日

宮崎県教育委員会

教育長 児玉 郁夫

## 例　　言

1. 本書は、建設省九州地方建設局延岡工事事務所の委託を受けて県教育委員会が実施した、一般国道10号土々呂バイパス建設予定地内に所在する林（はやし）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和61年度の試掘調査を経て、61年度～63年度の三次にわたって実施した。なお61年度の第1次調査については、「宮崎県文化財調査報告書」第30集（昭和62年）に一部概略を報告し、62年度の第2次調査については概要報告書を刊行している。
3. 調査体制は、第I章第2節のとおりであるが、昭和61年の試掘調査には北郷泰道が当たり、第1次調査には北郷と近藤協、第2次調査には北郷、第3次調査には岩永哲夫と北郷が当たった。
4. 本書の執筆・編集には、北郷と近藤が当たった。  
第I章・第III章・第IV章を北郷、第II章を近藤が分担した。
5. 試掘および第1次調査では、水田跡の確認、発掘のため、プラントオペール分析を、宮崎大学助教授藤原宏志氏、および古環境研究所にお願いした。また、第2次調査では地理学の視点から山梨文化財研究所外山秀一氏に特別調査をお願いした。
6. 出土遺物は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

## 本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
第1節 遺跡の位置と環境 .....	1
第2節 調査の経過 .....	2
第Ⅱ章 第1節水田面積調査区 .....	7
1. 調査区の設定と調査の方法 .....	7
2. 水田面B発掘区 .....	9
3. 水田面C発掘区 .....	10
4. 水田面E発掘区 .....	11
5. 水田面H発掘区 .....	11
6. 水田面出土遺物 .....	13
第2節 畑地面発掘区 .....	15
1. 遺構 .....	15
① 石積列 .....	15
2. 遺物 .....	15
① 陶磁器 .....	15
② 輸入陶碗器 .....	23
③ 石器 .....	26
3. 一号竪穴住居 .....	29
A 遺物 .....	29
4. 二号竪穴住居 .....	32
A 遺物 .....	32
5. 一号土壙 .....	33
6. 一号集石遺構 .....	33
第3節 小結 .....	38
第Ⅲ章 第2・3次調査 .....	40
第1節 発掘調査の経過 .....	40
第2節 旧石器時代 .....	41
第3節 古墳時代 .....	43
第4節 歴史時代 .....	44

第5節 小 結 .....	45
第IV章 挖立柱建物跡の建築尺度について .....	47
 プラント・オバール分析結果報告 .....	60
1. 分析法 .....	61
2. 分析結果 .....	63
3. 所 見 .....	63

## 挿 図 目 次

第1図 越路遺跡出土子持勾玉実測図 .....	2
第2図 遺跡分布図 .....	3
第3図 発掘調査区及び周辺地形図 .....	5
第4図 水田面発掘区・遺構配置図 .....	8
第5図 水田面B・C発掘区遺構配置図 .....	9
第6図 水田面E発掘区遺構配置図 .....	10
第7図 水田面G発掘区遺構配置図 .....	11
第8図 水田面H発掘区遺構配置図 .....	12
第9図 H発掘区①畦畔断面図 .....	12
第10図 H発掘区北壁土層断面図 .....	13
第11図 H発掘区畦畔交差部土層断面図 .....	13
第12図 水田面出土遺物実測図 .....	14
第13図 煙地面発掘区遺構配置図 .....	16
第14図 陶磁器実測図(1) .....	18
第15図 陶磁器実測図(2) .....	19
第16図 潟戸系陶磁器実測図 .....	21
第17図 陶磁器実測図(3) .....	22
第18図 陶磁器実測図(4) .....	23
第19図 輸入陶磁器実測図 .....	24
第20図 須恵器実測図 .....	24
第21図 国產陶器実測図 .....	25

第22図	旧石器実測図	27
第23図	石錐、凹石、石鐵、土錐実測図	28
第24図	一号竪穴住居実測図	30
第25図	一号竪穴住居出土土器実測図	31
第26図	二号竪穴住居実測図	32
第27図	二号竪穴住居出土土器実測図	34
第28図	一号土壤実測図	35
第29図	一号集石遺構実測図	35
第30図	基本土層図	41
第31図	A地区焼石分布図	42
第32図	須恵器环身・蓋実測図	43
第33図	五輪塔実測図	44
第34図	掘立柱建物跡配置模式図	46
第35図	掘立柱建物跡タイプ別配置図	48
第36図	掘立柱建物跡群遺構実測図	49
第37図	遺物実測図(1)	50
第38図	遺物実測図(2)	51
第39図	遺物実測図(3)	52
第40図	遺物実測図(4)	53
第41図	遺物実測図(5)	54
第42図	遺物実測図(6)	54
第43図	遺物実測図(7)	55
第44図	掘立柱建物跡実測図(1)	56
第45図	掘立柱建物跡実測図(2)	57

## 表 目 次

表 1 国産陶器観察表 .....	36
表 2 須恵器観察表 .....	37

## 図 版 目 次

図版 1 水田面遠景 .....	79
畑地面より水田面を眺む	
図版 2 畦畔断面 .....	80
木杭検出状況	
図版 3 出土遺物 .....	81
図版 4 出土遺物 .....	82
図版 5 出土遺物 .....	83
図版 6 出土遺物 .....	84
図版 7 水田面調査区全景 .....	85
水田面 G 区	
図版 8 水田面 B . C 区 .....	86
B 区 . 木杭検出状況	
図版 9 畦畔断面 .....	87
H 区 畦畔交差部土層断面	
図版10 石積列周辺精査状況 .....	88
一号土壤	
図版11 石積列の検出状況 .....	89
図版12 二号竪穴住居 .....	90
一号竪穴住居出土土器検出状況	
図版13 出土遺物 .....	91
図版14 出土遺物 .....	92
図版15 出土遺物 .....	93
図版16 出土遺物 .....	94
図版17 出土遺物 .....	95

図版18	2次調査遺景	96
掘立柱建物跡検出状況		
図版19	2次調査掘立柱建物跡検出状態	97
図版20	2次調査A地区調査区	98
2次調査焼石検出状態		
図版21	3次調査B地区調査区	99
3次調査A地区調査区		
図版22	3次調査掘立柱建物跡検出状態	100
図版23	出土遺物	101
図版24	出土遺物	102
図版25	出土遺物	103
図版26	出土遺物	104
図版27	出土遺物	105

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 遺跡の位置と歴史的環境

林遺跡は、延岡市伊形町字林に所在する旧石器時代・古墳時代・中近世の三時期にわたる複合遺跡である。延岡市の中心街から南へ約6kmにあり、日向灘の海岸線からは西へ約1.5kmにある沖積平野に突き出した独立丘陵の標高5~8mの南斜面に立地している(第1図1)。

延岡市における歴史の展開は、平野部に枝葉のように突き出した丘陵と、その丘陵と河川に細分された平野を舞台としている。従って、県央部を中心とした大淀川、一つ瀬川流域のような広がりを持つ平野とその西に形成された広い平坦面をもつ火山灰台地を舞台として展開する地域史とは、やや趣の異なる様相が看取されるのである。

延岡市における旧石器時代の遺跡は、これまで数箇所の地点において表採されていたに過ぎなかつたが、1985年に発掘調査された赤木遺跡(第1図16)において、初めて旧石器時代の様相が本格的に明らかになった。赤木遺跡では、小範囲の面積のなかで多量の石器および剥片が出土し、県北における旧石器時代の代表的な遺跡となった。第二オレンジ(AT層)までの層位で出土した遺物は細石刃、細石核、ナイフ形石器、尖頭器などである。また、新たな知見として本年度の延岡市教育委員会の片田地区遺跡の発掘調査により旧石器時代の遺物が検出されている。

続く縄文時代では、県内で顕著な貝塚の少ないなか、早期からの大貫貝塚(第1図10)、後期からの沖田貝塚など多くの貝塚の存在が知られている。また、これも県内では類例の少ない石刀が2本、出土地不明ながら存在する。最近の発掘調査例では、県教育委員会の実施した地蔵ヶ森遺跡において集石遺構及び縄文早期の遺物が検出されているし、あるいは延岡市教育委員会の実施した今井野遺跡の発掘調査でも縄文時代の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代では、三須町出土の瀬戸内系の土器がある。ことに二段に矢羽根透かしをもつ高环形土器は県北における瀬戸内地方との文化交流を知るうえで貴重な遺物である。また石器類では、古川町から出土した石庖丁が朝鮮半島との関係が注目されている擦切技法による孔をもつ製品で分布圏のうえで貴重な遺物となっている。

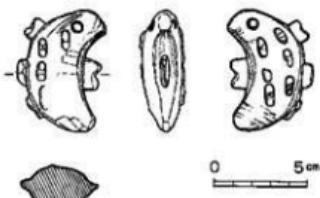
しかし、縄文・弥生時代を通じて本格的な発掘調査の経験は少なく、近年徐々にその件数が増えてはいるが、まだ基本的な歴史像を描くに十分な資料を蓄積するには至っていないといえる。

それに対し、古墳時代に関しては、古い調査例ながら大正から昭和の初めにかけての鳥居龍藏による古墳に関する発掘調査があり、また昭和45年には旭化成工業の造成工事に伴う櫻

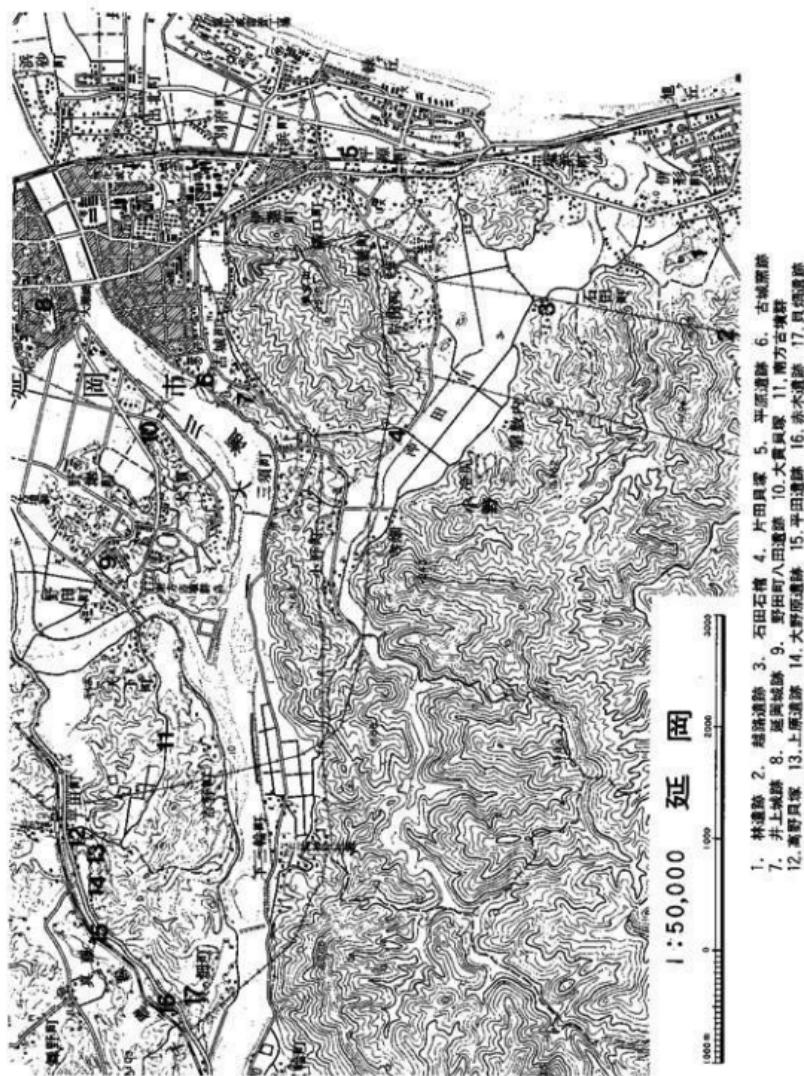
山古墳群の発掘調査がある。宮崎平野周辺地域では余り石棺系の埋葬施設をもつ墳墓の少ないなか、石棺系の埋葬施設の優位性は地質的な要因も含め県北における特徴として考えることができる。一方、住居跡については、昭和52年に市道改良工事にともない野田町八田遺跡（第1図9）が発掘され、古墳時代初期の住居が検出されている。

林遺跡に直接関係するところでは、子持ち勾玉（第1図）を出土した越路の祭祀遺跡（第2図1）がある。越路は、林遺跡のすぐ西方の跡およびその西斜面を指す。偶然の機会による出土ながら子持ち勾玉の出土は、宮崎県内では五ヶ瀬町からの出土2例などがあるのみで類例のすくない資料である。遺跡の性格と歴史的位置付けは今でも判然としないが、今回の林遺跡の調査で時期的に関係すると思われる須恵器・土師器が出土しており、この2地点の遺跡を結ぶ理解は重要な課題となる。

中世から近世にかけては、延岡の地も例外でなくめまぐるしい歴史を刻み、宇佐官領の莊園から島津莊のとび地となり、その中に伊富形莊の名も見えるが、やがて島津、伊東、土持の三勢力の覇権争いを経て、ようやく内藤の藩政に至り、安定した時代を迎えている。こうして城下町として延岡は発展したが、延岡城跡（第2図8）をはじめとする城跡、古城窯跡（第2図6）、小峰窯跡などの近世窯跡など歴史時代の遺跡も数多く残されることになる。林遺跡においても中世から近世にかけての土器や陶磁器とともに柱穴群が多く検出され、獨立柱建物跡の調査は延岡市内では初見に属するが、これらの資料の蓄積によって中世から近世にかけての歴史が立体的に明らかになるであろう。



第1図 越路遺跡出土子持勾玉実測図



第2図 遺跡分布図

## 第2節 発掘調査に至る経緯と経過

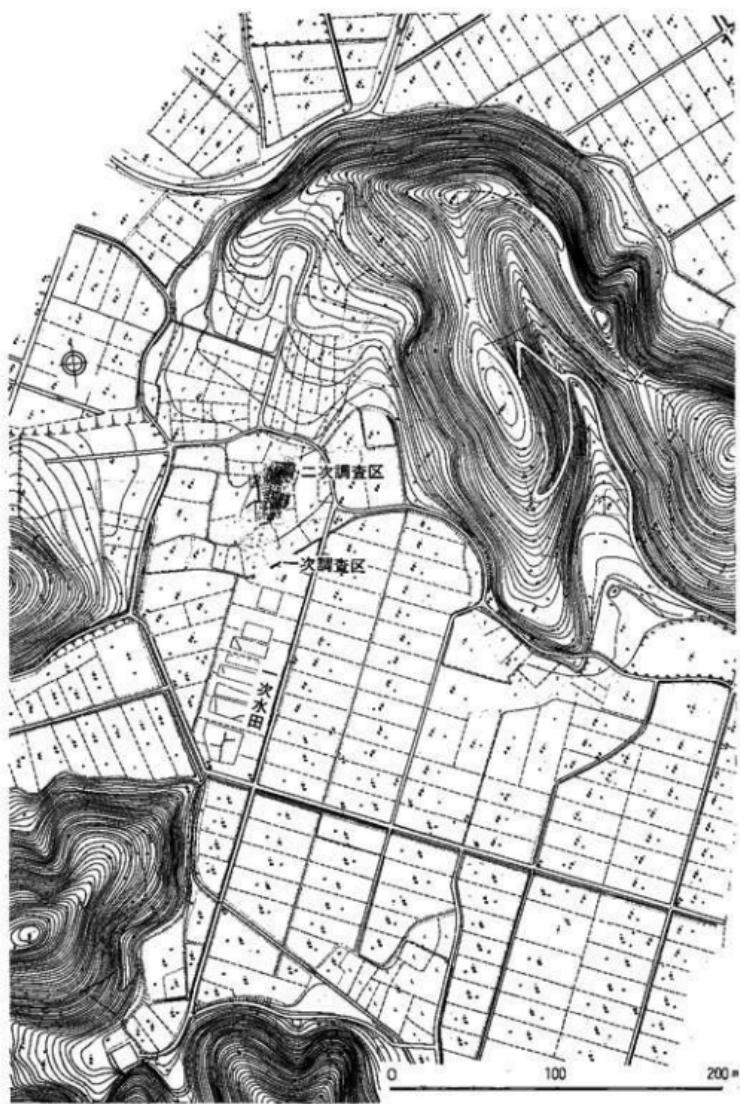
建設省による一般国道10号土々呂バイパスの建設が計画されるにともない、県文化課で路線内を踏査した結果、伊形町に所在する独立丘陵の南斜面において土器片及び剥片の散布を確認することができた(第3図)。水田部分を含め試掘を行った結果、土師器片などの遺物類と柱穴群の一部と古水田の存在を確認した。それをもとに遺跡の規模と調査方法の検討を行い、協議の上、水田跡の可能性から南に展開する現水田面と路線にかかる斜面地を発掘調査することになり、工事計画との絡みで水田跡の調査を昭和61年度に、斜面地の調査を62年度に実施することになった。しかしその後、幾つかの調査計画の変更があり、第1次調査の過程では斜面地の一部に調査範囲を広げ、また第2次調査では未買収地との関係で一部の調査を、次年度に第3次調査として実施することになった。

第1次調査は水田跡調査のため現水田利用との関係から昭和61年4月14日に現場入りし、宮崎大学助教授藤原宏志氏および古環境研究所の協力をえて、水田面の検出につとめた。その結果、5月9日に畦らしき土層を確認し、以降水田部分では水田跡の面検出を進めた。検出した水田は遺物などの検討から、近世から大きく遡らないことが明らかとなり、河川および海水などとの関係から水田の開発が思うように進まなかった地域史の実体を裏付けた。その間、6月3日には畑地部分での柱穴検出も進み、掘立柱建物跡さらに古墳時代の堅穴住居跡の存在が明らかとなった。

この第1次調査の結果、原位置を留めるものではなかったが、尖頭器(第4図3)の出土があり、畑地の部分に旧石器時代の包含層が存在する可能性がでてきた。従って、第2次調査は掘立柱建物の検出とともに、旧石器時代層の追及が課題となつた。

第2次調査は、昭和62年10月26日に現場入りし、早くも30日にはナイフ形石器の出土をみたが、耕作土中に含まれたもので層位を確定にはいたらなかった。その後も畑地の上段で剥片および焼石群を検出したが、濃密な分布を示すものではなく、また同層からは製品の出土をみなかつた。一方、掘立柱建物跡については、第1次調査で断片的であった柱穴群のはば全体像を捉えることができた。また、旧石器時代を含む遺跡としては標高5~8mというこれまで知られていなかつた低位の遺跡であり、また独立丘陵上という地理的条件の調査のため、山梨文化財研究所外山秀一氏には地理学からの特別調査をお願いしている。

第3次調査は、平成元年1月9日から調査を実施し、第2次調査において全体像を明らかにすることの出来なかつた掘立柱建物跡の柱穴群の検出に努めた。また、旧石器層の明確な把握も課題であったが、独立丘陵端部という地形的な土層形成のゆえか、基準的な層位関係を明らかにすることは出来なかつた。



第3図 発掘調査区及び周辺地形図

## 調査体制

調査主体 県教育委員会

教育長	船木 哲 (~62年度)	児玉 郁夫 (63年度~)
文化課長	永井 初志 (~62年度)	久徳 菊雄 (63年度~)
同課長補佐	梨岡 孝 (61年度)	木幡 文夫 (63年度)
	片野坂 次男 (元年度)	
庶務係長	日高 達男 (61年度)	小倉 茂光 (主幹・63年度~)
埋蔵文化財係長	田中 茂 (61年度)	丸目 恵教 (62年度)
	岩永 哲夫 (63年度~・3次)	
主任主事	北郷 泰道 (試掘・1~3次)	
同	近藤 協 (1次)	

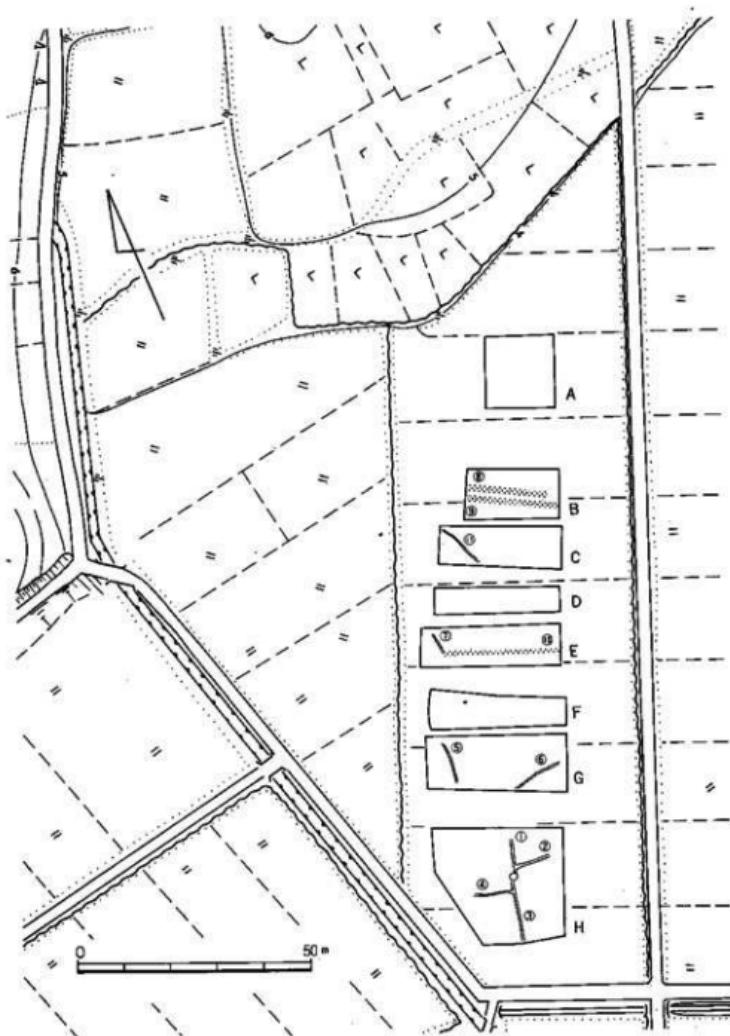
## 第Ⅱ章 第1次調査

### 第1節 水田面調査区

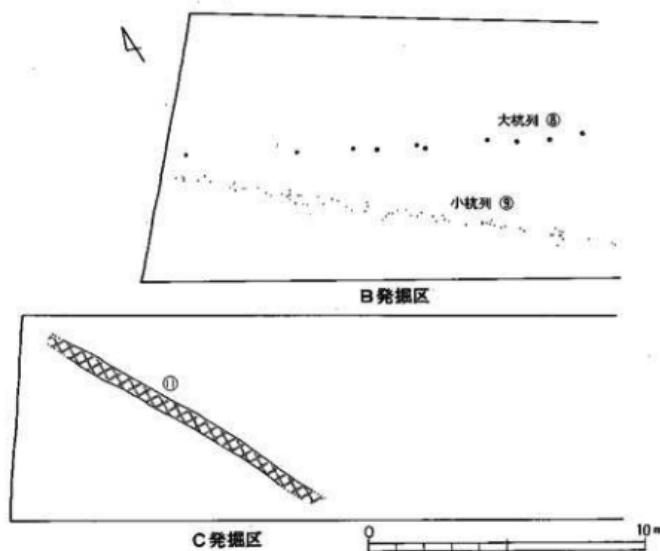
#### 1. 調査区の設定と調査の方法

現在、水田面となっている標高約3.0mの沖積地を、計画路線幅×計画路線長で全面発掘することを最初は意図していたが、雨期と重なったこともある、地下水位の上昇および北側に展開する丘陵谷部からの湧水が著しかったために断念し、調査区全面を小区画にくぎって、区画ごとに調査を実施した。調査にあたっては、調査区に沿って、約110mの細長い水抜き、および土層確認のための溝を重機によって掘削し、さらに南端に貯水用の大穴を穿って水中ポンプにより排水した。

小調査区画は、北よりA区(13m×12m)、B区(16m×9m)、C区(22m×7.5m)、D区(21m×4m)、E区(25m×7.5m)、F区(24m×6m)、G区(25m×9m)、H区(23m×18m)とし、合計で1520m<sup>2</sup>となる。各区画においては、現耕作土(15~25cm)を重機によって剥ぎ、その後、手振りによって4~5cmづつ数回剥いで、畦畔および水路構造、遺物の精査に努めている。土層を観察すると、水田址堆定層の上部に砂層、およびそれに相当するような目安となるような層をはさむために、水田土壤の色調、土質、粘度等の変化によってのみ遺構を識別するほしかなかった。畦畔は小区画の断面にのみ、その凸面を観察することができた。畦畔のような凸面は、溝状遺構で代表される凹面にくらべて検出は容易ではないが、畦畔は厳密には恒常的な施設でもなく、それ自体も水田土壤と同質であるために、その高まりを当時のまま検出することと、その構築された時期を特定することは至難である。本遺跡の場合は、酸化鉄の水和層(黄帯)が厚く、比較的明瞭であってその前後をはさむ層の鍵層となっている。



第4図 水田面発掘区・造構配置図

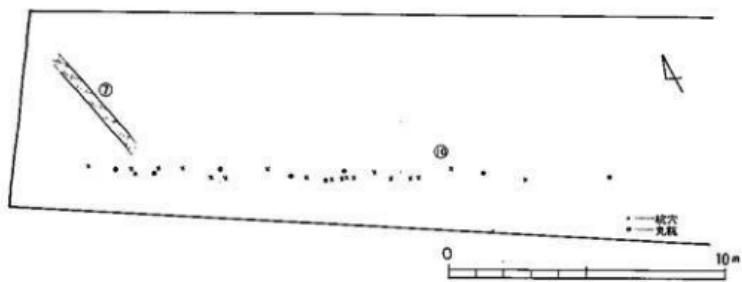


第5図 水田面B・C発掘区遺構配置図 (1/200)

## 2. B水田区画

B水田区画では、表土（耕作土）下の第2層上面において、二列の杭列を検出した。第2図⑧、⑨がそれである。⑧の杭列はN-58°-W方向に一直線に延びるもので、直径4.0cmの丸杭がほぼ100cmの等間隔で建てられていたものと復元堆定される。丸杭は、その残存状態良好な樹皮により桜材と認められる。最も東端に検出された杭は、この杭列では唯一の角材であって一辺約3.5cmを測る。

第2図⑨の杭列は、N-54.8°-Wの方向を示し、西端で⑧杭と交わろうとする位置にあり、このことから⑧杭列と⑨杭列とは時期を異にする施設であることは明白である。⑨の杭は⑧杭に比較して小型（直径約2.5cm）であり、密にやや配列が乱雑ではあるが、先述の方向性は全体として維持される。小杭の抜けたものも多々あり、それは小さな杭穴として残っている。

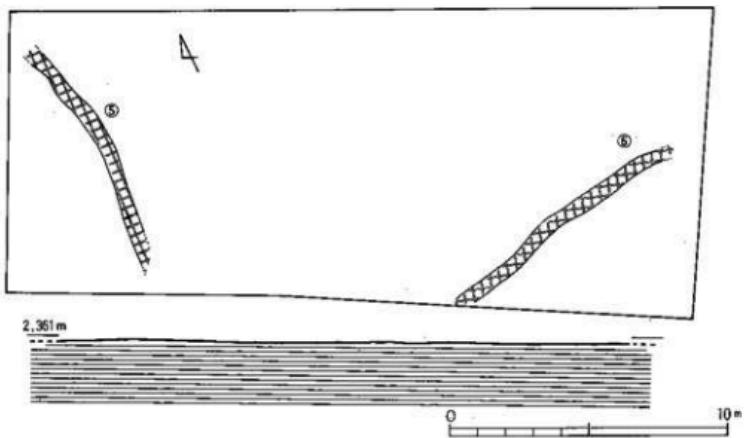


第6図 水田面E 発掘区遺構配置図 (1/200)

⑧⑨杭とともに、先端は鋭利にとがっている。⑧、⑨杭列は、畦畔の土止め用としての機能が窺われるものである。また、⑧⑨はE水田区画の⑩杭列とともに、現水田の畦畔方向に近く、区画整理される以前の近代水田にかかる畦畔遺構かと考えられる。ただし、他の畦畔でみられた周辺水田面との色調の相違は認められなかった。

### 3. C水田区画

C区として設定した区画の、西側寄りに検出した畦畔遺構には第2図⑪畦畔がある。これは、N-25°-W方向に指向する長さ11m、幅50cmの畦畔であるが、畦畔の凸面は検出できず、これも平面的に、色調の相違によってそれと確認できたものである。色調は周辺土壤との相違が少なく、明灰色を呈する。この畦畔はまた、⑤、⑦畦畔遺構と同様の方向性を認められる。



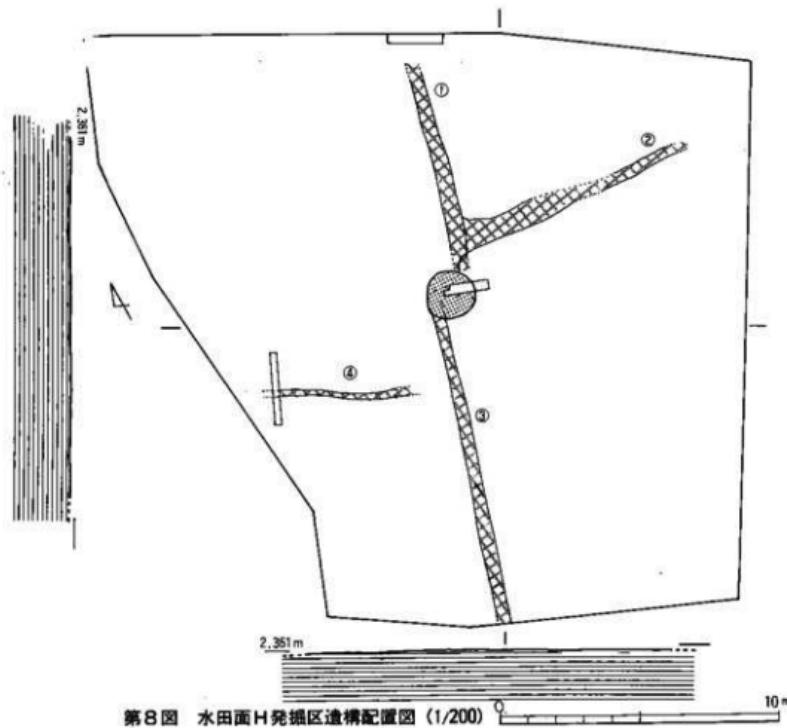
第7図 水田面G発掘区遺構配置図 (1/200)

#### 4. E水田区画

D区の南に位置する25m×7.5mの発掘区である。ここでは畦畔⑦、杭列⑩を検出した。⑦はC区①、G区⑤、H区①、③と方向を同じくするものでこれらと同時期のものと推定される。⑦は幅40cm、長さ3.7mを計測する。杭列⑩はその方位N-60°-WにあってB区にみられた杭列⑧、⑨と同じくする。杭は抜けて杭穴のみ遺存しているもののが多い。遺存しているものは丸杭であって直径4~5cmと太いものが多くなっており、B区の⑧⑨杭列と杭の規格上は異なっている。方向性はみられるが、その間隔については規則性はみられないが、全体に密に打たれている。

#### 5. H水田区画

水田部調査区としては、最も南端にあって調査面積380m<sup>2</sup>最大である。この区画では、中央付近に直径約1.8mの円形遺構が検出された。これは畦畔①と③の接続部位にあたっており、それぞれ周辺の四筆の水田区画の要に位置している。周辺の粘質土とは明らかにその性質を異にして、やや砂質に近いのか周辺よりも乾燥の度合が早く、水分をよく吸収する。断面は半円形に近く掘り込まれた形跡があるが、上部は逆に盛り上っていたのではないかと考えられ、水田面にとり残された島状を呈していた可能性がある。5ヶ所の杭穴が認められるが、不規則な配列である。畦畔①、②は、G区の畦畔⑥とともに一筆の畦畔を形成すると考えら



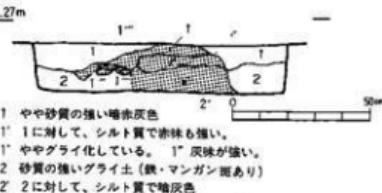
第8図 水田面H発掘区造構配置図 (1/200)

れる。同じく畦畔③④も合致して一筆の水田を形成する。畦畔①②③は幅約60cmではほぼ同一であるが、④は20cmとやや狭い。また、④の方向も②⑥よりややズレてN-66.5°-Wにある。

畦畔はいずれも、高まりを検出し得ず平面的に色相の違いによってようやく検出したもので、その層界も不明瞭なものである。土層断面によって確認された畦畔は①のもので、第6図に示すものである。その形状は、いわゆる“カマボコ状”を呈するものであった。

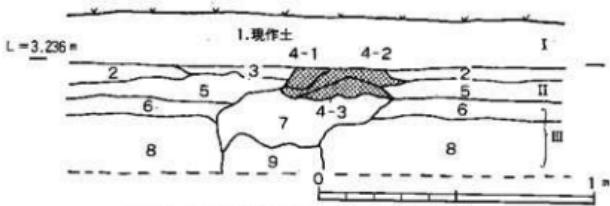
## 6. G水田区画

F区の南に位置する調査面積22.5m<sup>2</sup>の調査区である。第3層上面において2本の畦畔造構を検出している。⑤⑥畦畔は一筆の水田区画を形成するもので、⑤は幅55cm、長さ8.3m、



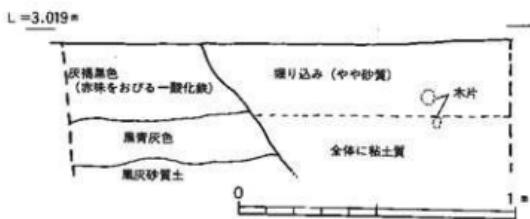
第9図 H発掘区①畦畔断面図

- 1 やや砂質の強い暗赤色
- 1' 1に対し、シルト質で赤味も強い。
- 1" ややグライ化している。1" 褐味が強い。
- 2 砂質の強いグライ土(鉄・マンガン斑あり)
- 2' 2に対し、シルト質で暗灰色



第10図 H発掘区北壁土層断面図(1/20)

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. 現耕作土、暗黒褐色            | 4. 哀時 4-1 砂質——5層に近い土質 |
| 2. やや臭味をおびた黒褐色          | 4-2 やシルト一層構がやや強い      |
| 3. 2.より赤味が強い            | 4-3 シルト——灰がやや強い       |
| 5. ややグライ化した層、灰みがかる      | (シルト質)                |
| 6. グライ土層 單色灰褐色          | (シルト質)                |
| 7. 6.に対しザラザラして、やや明るい灰褐色 | (砂 質)                 |
| 8. 單色灰褐色(灰が青みをおびる)      | (やや砂質)                |
| 9. 鉛化鉄の含有が多く赤味をおびる      | 鉛化鉄・マンガンを含む。          |



第11図 H発掘区畦畔交差部土層断面図(1/20)

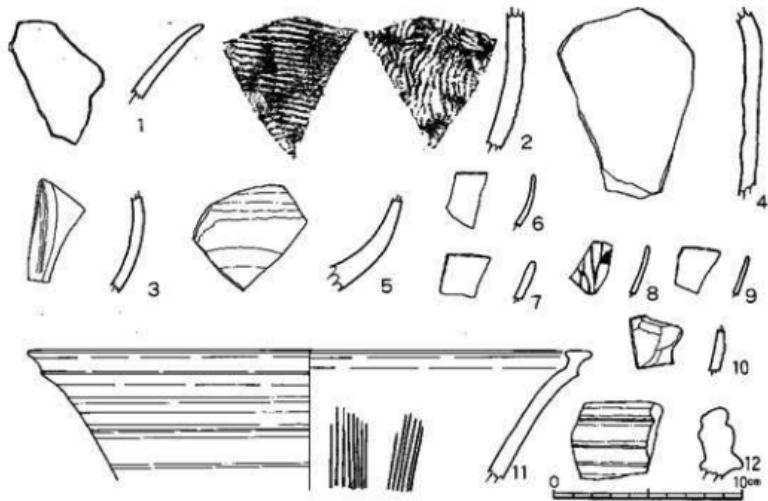
⑥は幅50cm、長さ9.0mを計測する。⑤はC区の⑪、E区の⑦畦畔と方向性を有し、同じく⑥はH区の②、④畦畔と方向をほぼ同じくし、これらは同時期の所産と考えてよい。検出した一筆を推定できる畦畔としては⑤⑥はその最大のもので、最低でも一筆約238m<sup>2</sup>の水田が推定できる。他の調査区検出の畦畔と同様にここでも畦畔の高まりはつかんでおらず、平面的に色調の違いによって確認したものである。

#### 7. 水田面出土遺物(第12図)

水田面精査中に出土した遺物には、第3層、第4層から出土した弥生土器、須恵器、陶器、磁器、黒曜石剝片、獸骨片があるが耕作によると考えられる破壊によって小破片となつて、出土量も僅少である。出土遺物のうち大部分を占めるのは肥前系の陶磁器片であり、C-1区から多く出土している。

1.は高環の口縁部とおもわれるもので、内面ヨコナデ、外面ナデ調整となる。胎土に1.0mm大の砂粒、同大の白色石英、その他石英微粒と角閃石を含む。2.は明灰白色の須恵器片で、

やや風化している。外面は平行タタキ調整。3.は輸入陶磁器で鎌蓮弁文碗の小破片である。焼成不良のためか、黄灰色に釉が発色している。4.は排水溝として設けたトレーンチ壁の第4層中から唯一出土した備前の壺または甕とおもわれる肩部にかけての破片である。上部に自然釉が多くかかり、浅緑色を呈する。内面は指頭で押したあとヨコナデ調整されており、デコボコしている。5.はおそらく唐津系の陶磁碗で、外面は白化粧に草木灰釉（浅緑色）。下部は鉄釉がかかる。内面は露胎となる。6.7.は乳白色をした京焼風陶器で、6.は特に器壁が薄い。ともに内外面ともに細かな貫入がみられる。8.9.は肥前系の染付碗の口縁部で、8.は網目文、9.は明灰色釉にやや大き目の貫入がはいる。10.は表面の剥げた擂鉢片。11.は口径27.6cm（推定）の擂鉢片。口縁が「T」字状を呈する特徴的なもので、口縁端は平坦に成形されている。口縁直下の内外に光沢のない暗赤褐色の鉄釉が波状に施釉される。内面に8条単位のタテ方向条線が全幅約2cmにわたってかれている。擂鉢としては器壁がやや薄手である。産地、時期ともに不詳である。12.も擂鉢の口縁部、外面に太い3条の段がみられる。内外ともに暗赤褐色（7.5YR3/2）の鉄釉がかかっている。11.12.とも近世か。



第12図 水田面出土遺物実測図(1/3)

## 第2節 煙地面発掘区

### 1. 遺構

水田面発掘区に隣接する水田面との比高約2.0mの微高地面にあり、低丘陵の末端部にある。一次調査において検出された遺構には、石積列遺構、竪穴住居(2軒)、集石遺構、土壙、それぞれ一基がある。

#### ① 石積列遺構

2号竪穴住居のすぐ北から、西へ25mにわたって延びる拳大から人頭大の石材を積み重ねて連ねる遺構である。東端ほど本来の構築時の状態を残しているものとおもわれ、幅60cm、現在の耕作地面からの高さ60cmを計測する。石材の積み重ね方は、規則性がなく丁寧とは言いかねるもので、やや乱雑に重ねられている。西側はその石積が崩壊し、幅1.0m~1.5mの幅で散乱した集石列となっている。散礫間、および石列の両脇より多数の遺物が出土し、西側の崩壊散礫部分にとくに集中している。

### 2. 遺物

遺物は石積列を検出、および除去する作業にかかわって検出されたものがほとんどであり、散礫間から出土したものも数多い。おそらく、耕作中の発見にかかわって、断続的に耕地外に投棄されたものと考えられ、その時期は遺物から近代に入ってから最近までと推定できる。

遺物の種類は種々多なもののが混在しており、ナイフ形石器等の旧石器から最近のガラス製品までが含まれるが、そのほとんどを占めるのは肥前系陶磁器である。

#### ① 陶磁器(第14、15、16、17、18図)

肥前系の磁器製品は17世紀前半から18世紀中頃の時期を与えられるもので、器種は碗・皿類を中心に、小皿、仏壇碗、鉢、香炉、手塩皿、瓶、小杯がある。染付のほかは、小量の青磁、白磁、鉄釉掛分、陶胎染付があって、染付の文様には網目文・捺花文・梅樹文・雨降文・寿字文が散見できる。唐津産の陶器の出土は量的には肥前系磁器に次ぐもので、砂目積のある皿、大皿、刷毛目の碗を代表器種として、刷毛目・二彩の瓶、擂鉢、火入類が出土している。この他唐津系では、内野山窯とみられる透明釉皿、鉄釉皿、青緑釉碗がある。

備前系の陶器では、玉縁口縁の大壺、15世紀から16世紀にかけての擂鉢がある。その他、壺・瓶類では常滑焼が若干混る。量的には、僅少であるが、瀬戸系19世紀の水滴、碗のほか、16世紀に下る美濃系の大目茶碗も小片がみられた。その他、17世紀後半から18世紀中葉の時



第13図 地面発掘区構造配置図(一次調査区) (1/300)

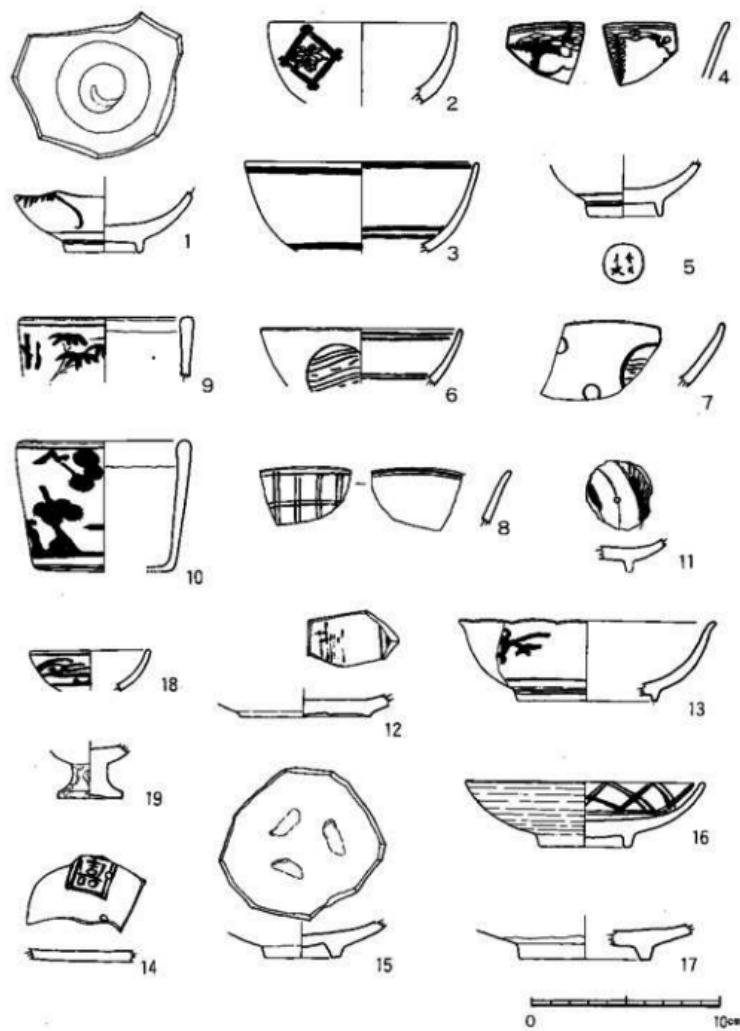
期を与えられる京焼風陶磁、18世紀から19世紀にかけての関西系の陶器碗・皿類も出土している。近代の陶磁器類では、明治後半から大正期にかけての銅版転写、型紙摺の皿類や、昭和に入ってからのゴム印版の皿類も数多い。

#### 染付碗（第14図 1.~8.）

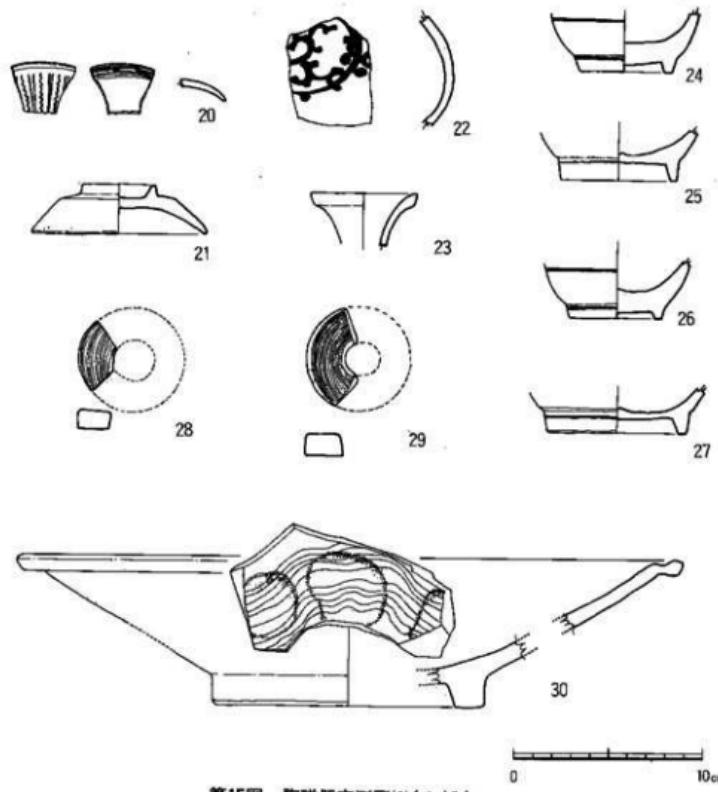
1.~8.は碗である。1.は見込みが蛇ノ目状に露胎となるもので、高台に界線、外面は花文である。2.は推定口径9.4cm、比較的厚手で、内湾する小型碗、コンニャク印判を施す。3.は推定口径12.1cm、口縁端はロハゲ。口縁直下の内外に界線、高台脇、見込みちかくにも同じく界線を施す。見込み近くが露胎となるので、おそらく蛇ノ目釉ハギと推定される。4.は染付梅樹文碗で端反形。1820年から幕末にかけてのもので肥前系である。5.は肥前系、18世紀頃のもので、高台内に「大明年製」の銘がみえる。染付は濃緑青色に発色している。6.7.は染付丸文碗で18世紀の中ごろから後半にあてられる。8.は同じく肥前系の端反碗で格子文がみられる。1820年から幕末にかけてのもの。1.2.5.6.7.は、"くらわんか手。とよばれる碗である。

#### 火入れ（第14図 9. 10.）

9.10.は火入れ類である。9.は推定口径8.0cmの竹葉文を施すもの。内面は口縁から約8mmのところまで、厚く釉がかかり、以下は露胎となっている。10.は推定口径8.0cm、器高7.0cmを測る肥前系の松木文火入。これも内面の口縁下1.5cmまで釉をかけ、以下露胎である。



第14図 陶磁器実測図(1)(1/3)



第15図 軽磁器実測図(2)(1/3)

染付皿 (第14図 11.~17.)

11.は肥前系染付皿の底部付近であるが、円形に加工されている。おそらく子供の玩具として二次加工されたものであろう。見込みにハマ溶着痕がある。18世紀の末から幕末にかけてのものである。12.は低い高台に特徴があり、高台内がまた蛇ノ目稚ハギであったものと推定される。稚は高台と疊付までかかる。稚は明灰色に発色し、染付は薄青色。最大の特徴は良質の磁器原料を使用していないことである。19世紀から幕末のものである。

13.は18世紀前半から中葉にかけての肥前系染付稜花皿。外面に太線で花文?。14.は底部

であり、外底にハリ支え痕2ヶ所が認められる。同じく肥前系で1680年から1690年代にあてられる。15.は唐津碗で高台、疊付、高台内とも釉が施され、見込みに3ヶ所の砂目積痕がある。1600年から1630年代にあてられる。16.は口径12.5cmの肥前系染付皿。見込は露胎で、内面に斜格子文が描かれる。釉は疊付、高台内にもかけられている。斜格子文は深草色に発色する18世紀のものである。17.は高台胎から、疊付、高台内にかけて露胎。見込は蛇ノ目釉ハギとなる。釉は灰緑色に発色する、いわゆる青緑釉皿である。17世紀後半から18世紀中葉にあたる。

#### 仏飯器（第15図 18. 19.）

18.は推定口径62cmの肥前系雨竜文染付仏飯器の坏部である。18世紀末から幕末。19.は脚部。底部は露胎で浅い上底。乳灰色釉である。

#### 蓋（第15図 20. 21.）

20.は外面に線文、内側に雷文のある肥前系の蓋。21.は白磁で灰白色の釉が全面にかかる。18世紀中葉から後半にかけてのもの。

#### 瓶（第15図 22.~27.）

22.は油壺として使用された唐草文瓶。外に細かな貢入。内面は露胎であるが、油のために褐色斑が残る。23.~27.は染付瓶。17世紀後半から18世紀前半の肥前系である。内側は勿論すべて露胎。

#### 戸車（第15図 28.~29.）

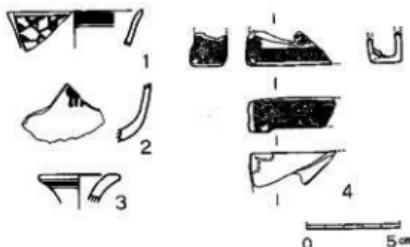
28. 29.は白磁の戸車である。両方とも外円側、内円側とも釉がかかり、外・内面は露胎。28.は直径5.6cm、内孔径1.75cm、厚さ1.2cm。29.は直径5.6cm、内孔径2.1cm、厚さ0.8cm~1.0cm。29.は中心部にむかって、両面ともゆるく内窪んでいる。

#### 大皿（第15図 30.）

唐津の刷毛目大皿で、砂胎土目痕がみられる。推定口径24cm。17世紀後半から18世紀中葉期の所産である。

### 瀬戸系陶磁器（第16図）

第13図は瀬戸系の陶磁器を一括して掲載した。1.～4.ともに19世紀のもの。1.は壺、2.は碗の腰部とおもわれる。2.の染付は瀬戸特有のもの。3.は朱色の上絵付による線文である。4.は水滴である。外面に青海波文を描き、底は露胎。



第16図 瀬戸系陶磁器実測図(1/3)

### その他の陶磁器（第17、18図）

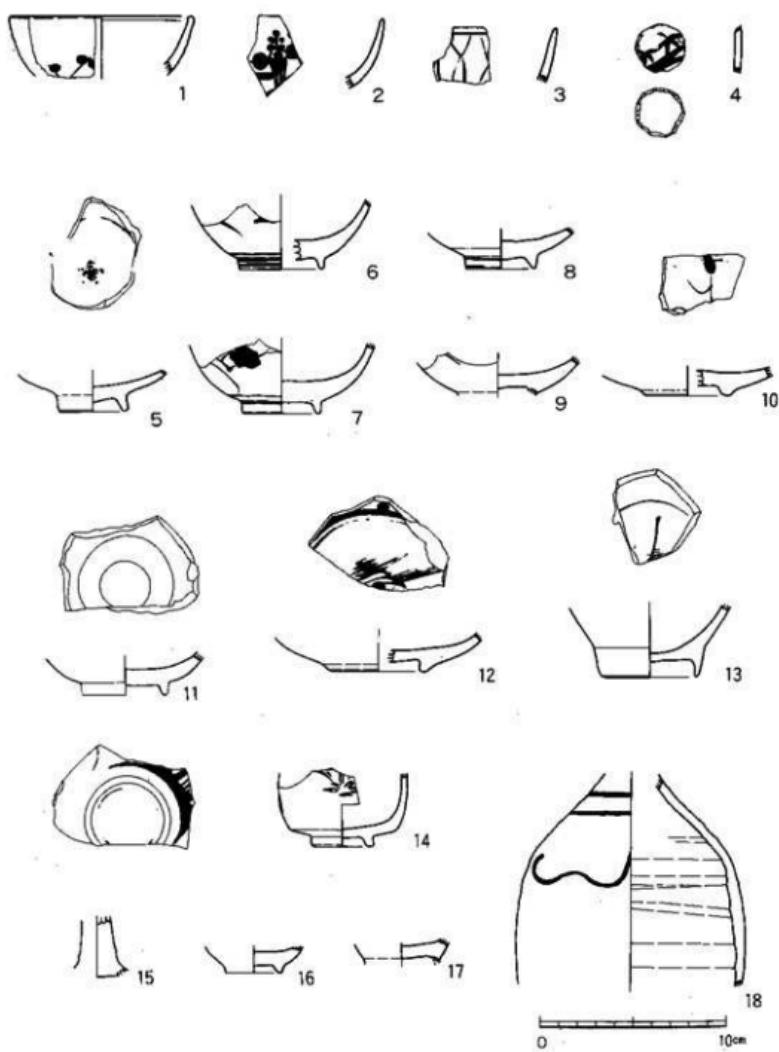
第17図1.2.3.は染付碗の口縁部である。1.は草に露文、2.は草花文、3.は内外に貫入が多く入る網目文碗であり、染付は緑色に発色する。17世紀中葉頃のもの。4.は打ち欠いて円形に加工し、子供の遊具に供されたと考えられる染付片で、竹文がみられる。

5.6.7.8.9.11.13.14.は染付碗の腰から高台にかけての底部片である。5.は青磁染付碗であり、見込に五弁花文、高台内に二重方形枠内に「簡江」銘がみえる。18世紀後半のもの。

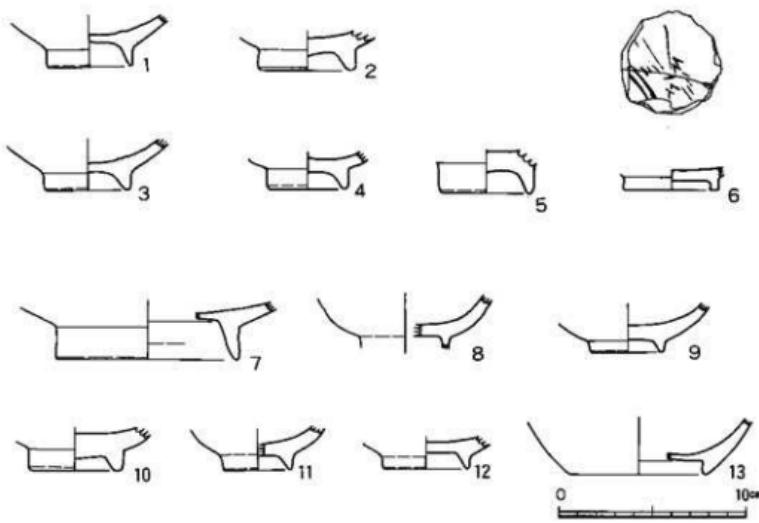
6.7.8.9.11.の見込はいずれも蛇ノ目釉ハギとなる。6.8.9.の外面には貫入がみられる。9.は陶胎染付碗で18世紀から19世紀前半のもの。11.は焼成不良となり釉は不透明で艶消し様になっている。13.は広東形碗で19世紀初頭から幕末のもの。14.は筒型の茶碗で、釉は疊付まで施されている。1820年から幕末にかけてのもの。

10.12.は染付皿。10.は内外に大きな貫入があり、見込に捺花文がみえる。1630～40年代のもの。12.はこれも内外に貫入がめだつ。17世紀前半。15.は仏壇器の脚部とおもわれる。16.17.は肥前の白磁小壺で17世紀後半から18世紀前半にかけてのもの。

18.は肥前系染付瓶。外面の釉は薄くかかり灰色に発色する。内面は露胎で薄茶色をしている。18世紀末から幕末期にかけてのものである。



第17図 陶磁器実測図(3)(1/3)



第18図 陶磁器実測図(4)

② 输入陶磁器（第19図）

白磁碗（第19図 1.~5.）

1. 2. 3.は玉縁口縁の白磁碗で、4.は見込みに描き文が施された底部で高台内は露胎となる。釉調は明オーリープ灰を呈している。5.は疊付、高台内ともに露胎となるもので12世紀から13世紀にあたる。

白磁皿（第19図 7.）

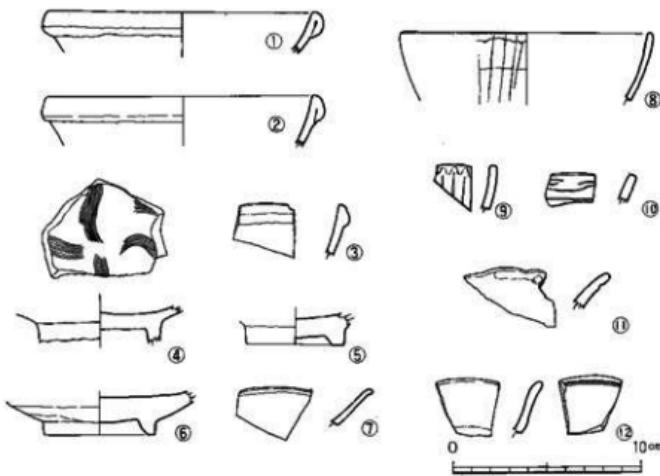
7.は器壁の薄い白磁皿の口縁部である。釉にボツボツがあり、ややザラつく。

青磁碗（第19図 6. 8. 9. 10.）

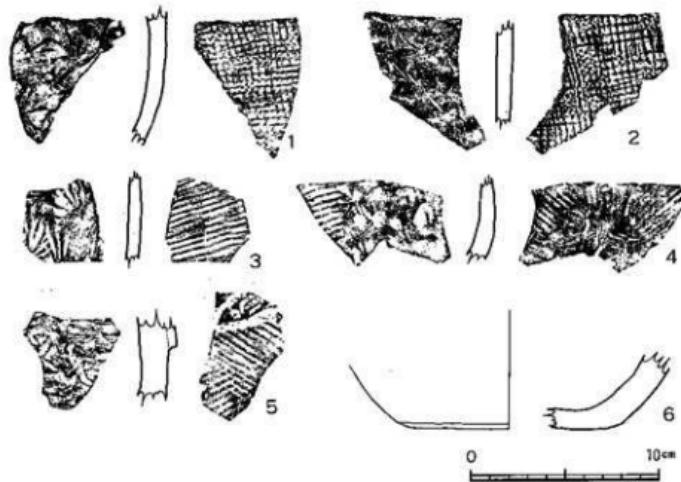
6.は高台脇から高台内にかけて露胎、高台は削り出して成形される。釉は枯草色に発色する。13世紀から14世紀にかけてのものである。8. 9.は蓮弁文碗の口縁部である。8.は線描の蓮弁文でやや形散化したもの。9.は刺先形の蓮弁文で15世紀後半から16世紀にあたるもの。

青磁穂花皿（第19図 11. 12.）

11.には口縁に釉の溶着痕がみられる。12.には内に二条の陰刻線がある。15世紀中頃から16世紀中頃にかけてのもの。



第19図 輸入陶磁器実測図(1/3)



第20図 須恵器実測図(1/3)



第21図 国產陶器実測図(1/3)

### ③ 石器

#### 旧石器（第22図）

##### ○ナイフ形石器

- 1.は平坦打面を残す縦長剥片を素材とするナイフ形石器。基部を整形して“つまみ”状に造り、全体形は木葉状を呈する。右片側縁は先端から3分の1ほどを刃部として残し、以下を刃済し加工で整形している。腹面はバルバスカー、リングが明瞭である。石材は明灰白色をした珪質凝灰岩製。器長6.9cm、最大幅3.1cm、最大厚0.8cmを計測する。
- 2.は先端を欠損するナイフ形石器。平坦打面を残す剥片を素材としており、基部は腹面から両側縁を整形して“つまみ”状につくる。左側縁は基部から先端部にかけて刃済し加工を施している。残存器長5.56cm、最大幅3.3cm、最大厚1.1cmを計測する。

##### ○台形様石器

- 3.は縦長剥片を素材としてつくられた台形様石器。器軸に直行する刃部を有し、両側縁は平行している。刃部以外は背面、腹面両側から全面にわたって調整され、平坦打面も残さない。石材は粒子緻密な珪質凝灰岩である。器長5.9cm、最大幅2.7cm、最大厚1.3cmを計測する。

##### ○オール

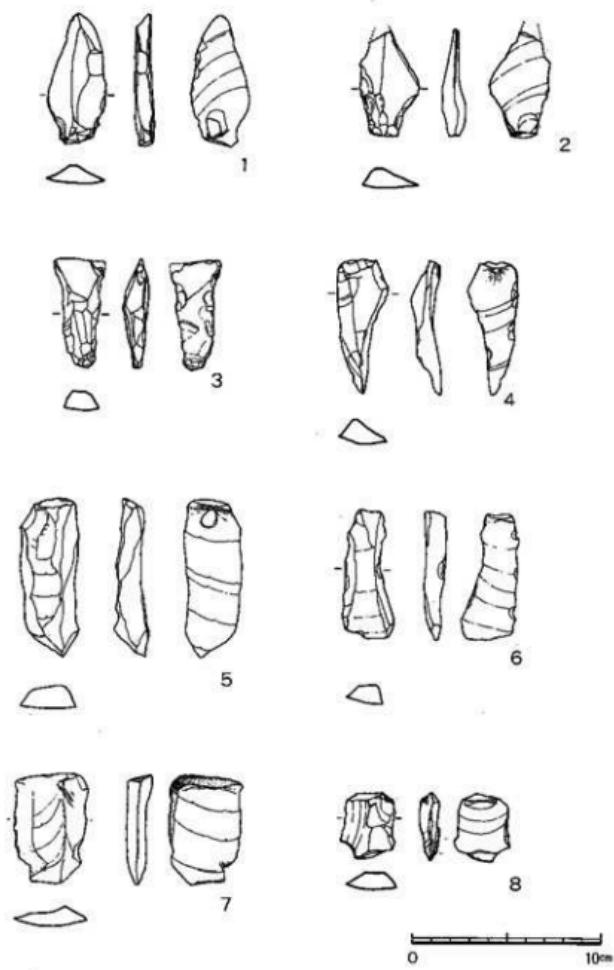
- 4.は腹面に明瞭なバルブを観察する縦長剥片の先端を錐状に加工するもの。器長7.2cm、最大幅2.7cm、最大厚1.3cmを計測する。

##### ○縦長剥片

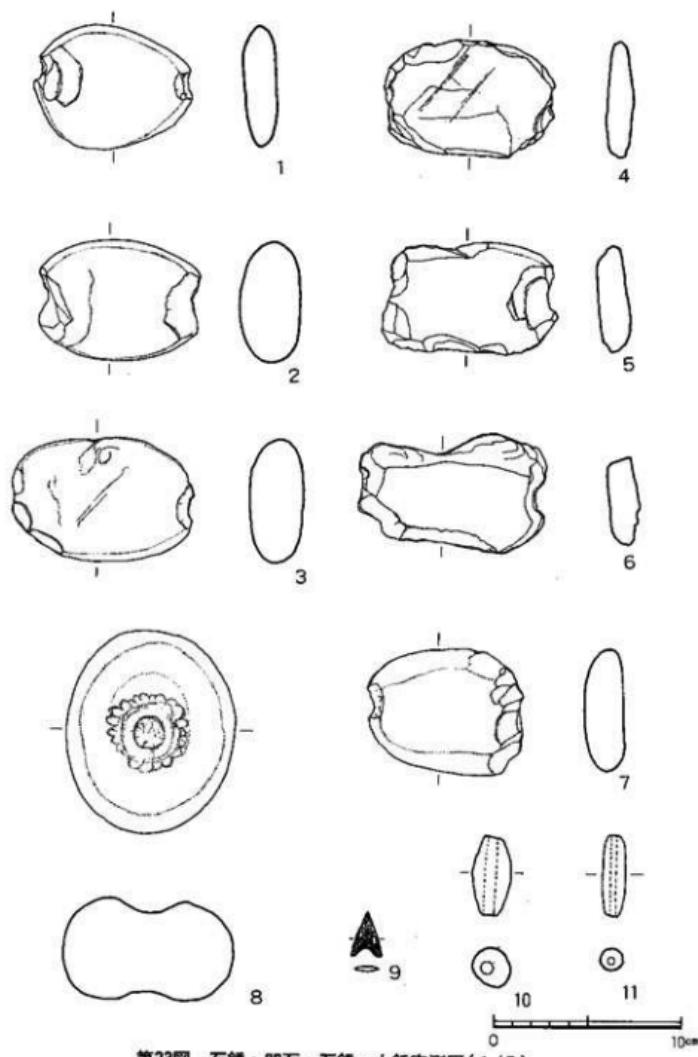
- 5.6.は縦長剥片。5.は器長8.45cm、最大幅3.05cm、最大厚1.4cm。6.は器長6.65cm、最大幅2.8cm、最大厚0.9cm。

##### ○スクレイパー

- 7.は器長5.9cm、最大幅3.8cm、最大厚1.05cmを計測するもので、打面は自然面となる。左側縁に使用痕が観察される。8.は左側縁に主要剥離面からの細部調整を施している。器長3.6cm、最大幅2.7cm、最大厚1.0cmを計測する。



第22図 旧石器実測図(1/3)



第23図 石錐・凹石・石錐・土錐実測図(1/3)

#### 石錘（第23図）

1.~7.は石錘である。1.2.3.7.は楕円形の偏平自然礫を用いたもので、長軸上の両端を打ち欠くもの。4.5.6.は偏平な板状礫の全縁面を打ち欠いて整形した打製石錘とでも呼称すべきもの。石錘はすべて明黄褐色の細粒～中粒砂岩製である。

#### 凹石（第23図）

8.は長径10.8cm、短径8.9cmを測る凹石で、表裏両面とも中央にくぼみを残すものである。

#### 石鎌（第23図）

石鎌は一点出土している。全長2.3cm、全幅1.6cmを計測する凹基鎌で、チャート製。

#### 土錘（第23図）

10.11.は土錘である。10.は全長4.2cm、胴部がふくらむ。11.は全長4.3cm、胴部は細身。

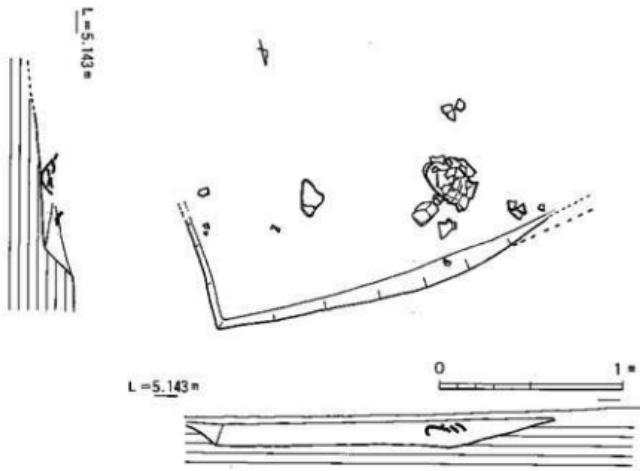
### 3. 一号竪穴住居（第24図）

水田調査区の北東端、緩やかな傾斜の丘地となっている箇所の、最も水田側に寄った緩傾斜地で検出された竪穴住居址である。南側の約80%を削平されており、北側隅部が残存している。方形プランを呈していたものと堆定され、南北辺0.65m、東西辺1.9mが確認された。床面は、細粒の角礫が多い硬質のもので、柱穴は検出していない。東西辺の北側中央部付近に丸底の菱形土器、鉢形土器片が出土している。

#### A. 遺物（第25図）

##### 甕

完形にちかく復元できる2個体の菱形土器、および鉢形土器1点が出土している。1.は口径17.3cm(推定)、器高27.7cm(推定)を測る中型の甕で、やや長胴、尖鋭化した丸底を有する。口縁は明瞭に外反し、胴部との境は稜をつくる。全体に風化著しい。外面はデコボコして粗い、胴部下半は一部黒変。胎土に0.5~2.0mm大の茶砂粒を含む。内外ともに橙色(5YR 6/8)をしている。2.は直口縁で外反しない菱形土器である。胴部中ばに最大径をもって底部にかけてこれも1.のように尖鋭ぎみであるが、平底にちかくなる。胴部上半の内外面に3条の粘土つなぎ目が観察される。器外面は粗いナデ、内面には斜方向のハケメ痕がわずかに残って

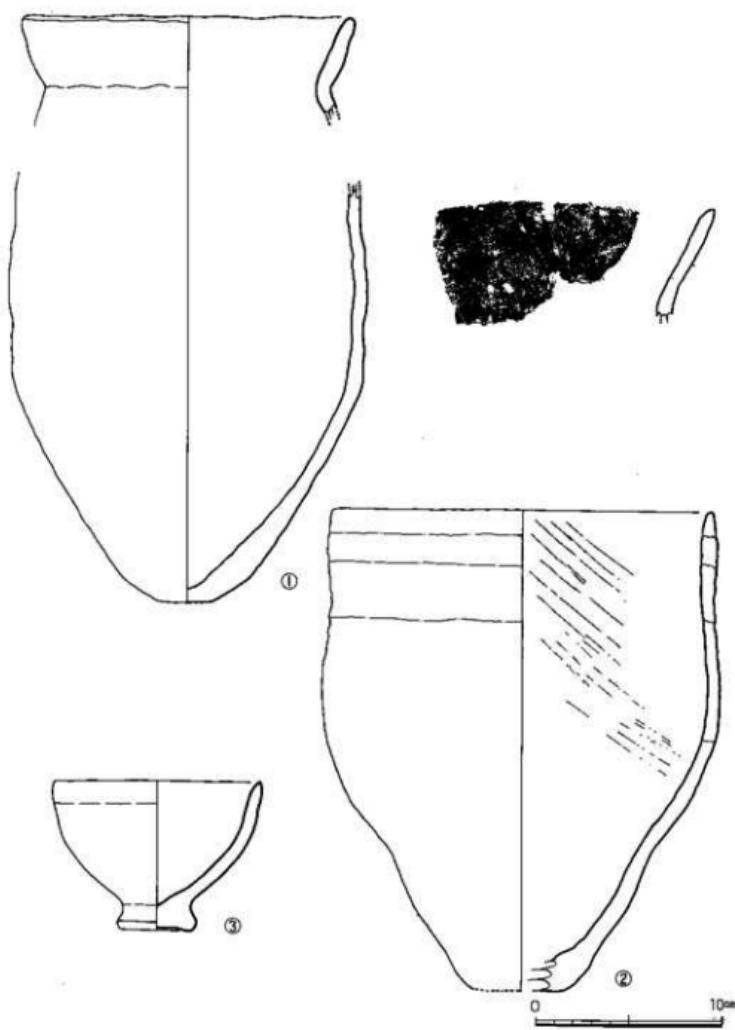


第24図 1号竪穴住居実測図(1/30)

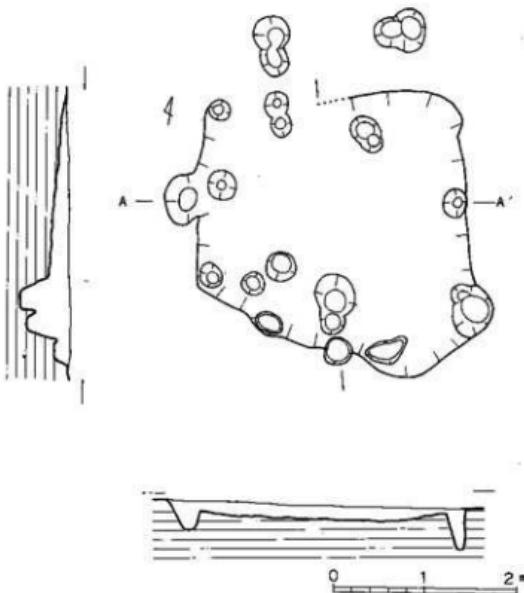
いる。これもひじょうに風化著しく、バインダーに浸して復元している。胎土に0.2~3.0mm大の茶色・白色・灰色の砂粒を多く含んでいる。外面、にぶい橙色(5YR 7/4)、内側、橙色(5YR 7/8)を呈する。復元推定口径19.7cm、器高25.7cmを測る。

### 鉢

3.は口径10.6cm、器高8.0cmを測る小型の鉢形土器である。底部は厚く高台状を呈し、底はやや上げ底ぎみでナデ調整。口縁下約1cmに粘土つなぎ目が明瞭に観察される。内面底には指頭圧痕がみられるが、その他は内外面とも風化著しく調整不明。胎土はややきめが粗い。0.2~3mm大の茶色・灰色の砂粒を多く含んでいる。内外とも橙色(7.5YR 6/8)を呈する。



第25図 1号竪穴住居出土土器実測図(1/3)



第26図 2号竪穴住居実測図(1/60)

#### 4. 二号竪穴住居（第26図）

一号住居の北東11m、積石列から南に2mのところに位置する。二号住居は当初、表土を剥いだ段階では、遺構として認められなかつたが、乾燥がすすむにつれてそれと確認できたものである。住居埋土は、床面土および周辺土とほとんど変化のない褐色土であり、1.0~2.0mm大の長石、石英、小砾、赤石砾を多く含み塊状となる硬質砂砾土という特徴的なものであり、一号住居のそれとまったく異なる。住居プランはひどく不整な正方形プランとなり、縁辺に沿って柱穴がめぐっている。

#### A. 遺物（第27図）

##### 高坏

1. 2. 3.は高坏の坏部であり、1. 2. 3.の順に重なり合って出土している。1.は脚部を欠くが坏部は完形で出土したものである。口径24.8cm、坏部高9.1cmを測る。坏部は深く、坏底部と上半部の接合部に明瞭な段状の稜がみられる。口縁端は急に外反して平坦におさめられ

ている。外面に斜方向の細かく丁寧なハケメ調整、内面にも細かいハケメを観察することができる。外面の口縁直下が一部剥げ落ちて、擦痕らしき圧痕がみとめられる。胎土細かく、0.05mm大の石英、砂粒、角閃石を含んでいる。1.は2.3.に比較して、造りが丁寧で上質な印象を受けるものである。2.3.はほぼ同程度の大きさをもつ坏部であるが、2.は坏底部と上半部の接合部1.ほどではないが明瞭である。3.は口縁部が先鋭化して丸くおさめられる。坏上半部の坏底部との取りつけ角度は1.→2.→3.の順に小さくなり、したがって坏部も浅くなっている。2.は口径(推定)19.2cmで、内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈している。3.は口径(推定)19.6mmで外面灰地(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。

4.~9.は高坏の脚部である。4.~8.は比較的高さの低い「八」の字に開脚するもので、6.では大きく開いた裾部も遺存しており、内面には接合部をもっている。調整はいずれも内外、ナデ調整で、橙色からにぶい黄橙色をしている。9.は脚部中ほどが膨らむ形状のものである。10.11.は甕形土器の底部で丸底状を呈している。

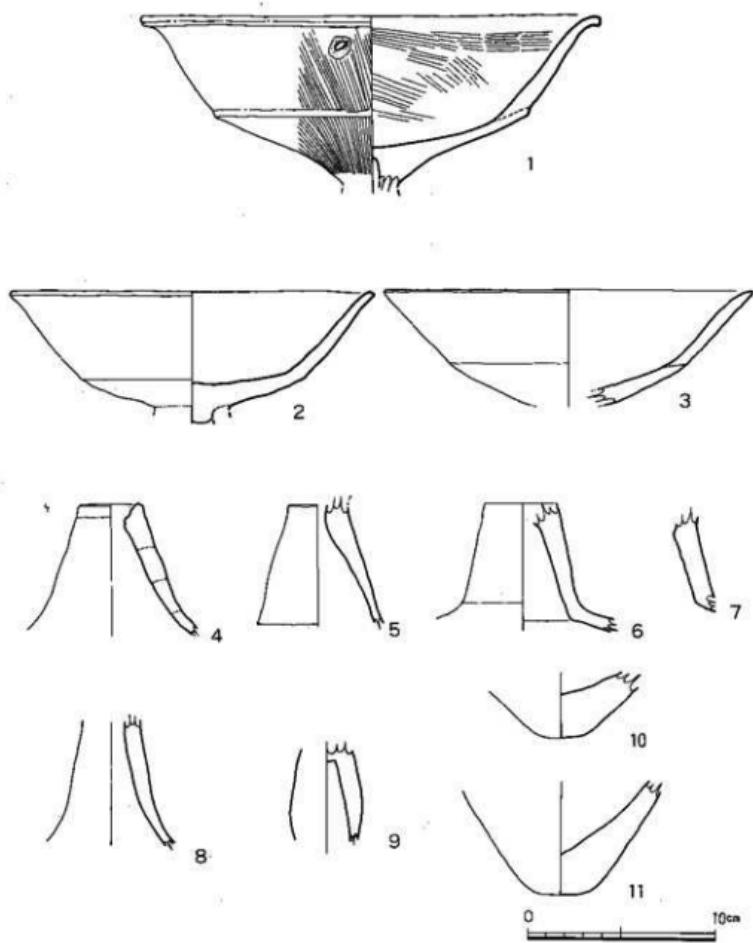
## 5. 一号土壤 (第28図)

二号竪穴住居の南に隣接して検出された土壤で、検出面から最深部で10.0cmを測るのみが遺存するにすぎないもの。平面形は長軸2.6m、短軸1.1mの長楕円形を呈し、西端に径10cmほどの小穴、東端に浅い小穴を穿つ。底面からやや上部で赤褐色の小角礫が検出されている。埋土は褐色粘性土であり、比較的しまって炭化粒を希に含んでいる。性格は不明である。

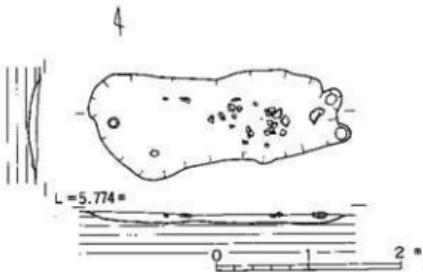
## 6. 一号集石遺構 (第29図)

この遺構は当初、石積列の倒壊したものが集石したものと考えていたが、石材を取り除くと、下部に浅い土坑をともなっていたので集石遺構として報告したい。

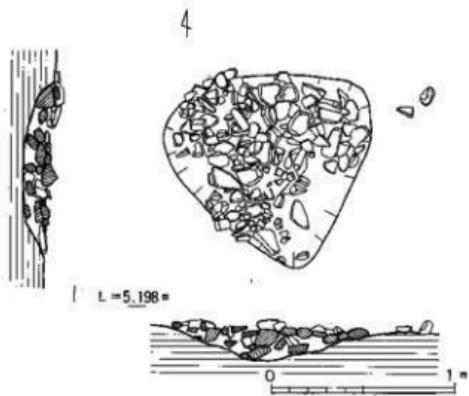
土坑のプランは隅丸の三角形で、最深部で約20cmの深さをもっている。直径は1.1m。礫は円礫よりも破碎した小角礫が多く、火を受けた形跡はない。礫中より備前系の檻体が出土している。



第27図 2号竪穴住居出土土器実測図(1/3)



第28図 一号土壤実測図(1/60)



第29図 1号集石造構実測図(1/30)

表1 国産陶器観察表（第21図）

図-番号	器種	部 位	色 調	胎 土	調 整	焼 成	備 考
21-1	擂 鋸	口 緑	外 暗赤褐色(5YR 3/2) 一赤褐色(5YR 4/6) 内 灰褐色(5YR 5/2) 一赤褐色(2.5YR 4/6)	きめ細か。 3mmほどの茶、肌色 砂粒を含む。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前
21-2	擂 鋸	口 緑	外 暗赤褐色(5YR 3/4) 内 によい赤褐色(5YR 4/3)	きめ細か。 2mmほどの乳白色の 砂粒をまれに含む。	外 ヨコナデ、ナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前
21-3	擂 鋸	口 緑	外 によい赤褐色(7.5R 4/3) 内 によい赤褐色(2.5R 4/4)	きめ細か。 2mm程の白色の砂粒 を少し含む。	外 ナデ 内 ナデ	良 好	備前
21-4	擂 鋸	口 緑	外面 明赤褐色 内面 (2.5YR 5/6)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前
21-5	擂 鋸	口 緑	外 によい赤褐色(7.5R 4/4) 内 によい赤褐色(5YR 4/4)	きめ細か。	外 ヨコナデ	良 好	備前
21-6	擂 鋸	口 緑	外 によい橙(5YR 7/4) 内 によい橙(5YR 6/3)	きめ細か。 0.1~2mm程の黑白乳 の砂粒を含む。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前
21-7	擂 鋸	口 緑	外 赤褐色(2.5YR 4/6) 内 明赤褐色(2.5YR 5/6)	きめ細か。 黒、灰、白等の細砂 粒を多く含む。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前
21-8	擂 鋸	口 緑	外 によい黄褐色(10YR 5/3) 内	きめ細か。 細砂粒(無茶)を含む。	外 ヨコナデ 内	良 好	—
21-9	擂 鋸	底 部	外 棕(7.5YR 4/3) 内 棕(7.5YR 4/4)	きめ細か。 2mm程の黒茶の砂粒 を含む。	外 ヨコナデ	良 好	備前
21-10	擂 鋸	底 部	外 によい赤褐色(2.5YR 4/4) 内 明赤褐色(2.5YR 5/6)	きめ細か。	外 ヨコナデ	良 好	備前
21-11	擂 鋸	底 部	外 灰黃(2.5Y 6/2) 内 灰(5Y 6/1)	きめ細か。	外 ヨコナデ、ナデ	良 好	備前
21-12	甕	口縁付近	外 棕(10YR 7/6) 内 棕(5YR 7/6)	きめ細か。 白乳色等の細砂粒~ 3mm大の砂粒を含む。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前液状 文有
21-13	甕	口縁付近	外 灰(5Y 5/1) 内	きめ細か。 肌色の細砂粒~砂粒 を含む。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	備前液状 文有
21-14	擂 鋸	口 緑	外 赤灰(2.5YR 4/1) ～によい赤褐色(5YR 5/3) 内 によい赤褐色(5YR 5/3)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	—
21-15	こね鉢	口 緑	外 灰(5Y 4/1~5Y 5/1) 内 灰(5Y 5/1)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	東播系
21-16	こね鉢	口 緑	外 黒(5Y 2/1) ～灰(10Y 5/1) 内 灰(10Y 5/1)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	東播系
21-17	こね鉢	口 緑	外 黒褐色(2.5Y 3/1) ～黄灰(2.5Y 5/1) 内 黄灰(2.5Y 5/1)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良 好	東播系

図面番号	器種	部位	色調	胎土	調整	焼成	備考
21-18	甕	口縁	外 にじい黄橙 (10YR 6/3) 内 にじい黄(2.5Y 6/3)	きめ細か。 肌色の3mm程の砂粒 を少し含む。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良好	玉縁口縁 (備前)
21-19	甕	口縁	外 灰褐(5YR 4/2) 内 灰褐(5YR 4/2)	きめ細か。 肌色の細砂粒を多く 含む。	外 ナデ 内 ナデ	良好	玉縁口縁 (備前)
21-20	甕	口縁	外 灰黄(2.5Y 6/2) 内 黄灰(2.5Y 5/1)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良好	常滑
21-21	甕	口縁	外 オリーブ黒 (7.5Y 3/2) 内 灰オリーブ(5Y 4/2)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良好	常滑
21-22	甕	口縁	外 オリーブ黒 (7.5Y 3/2) 内 灰オリーブ(5Y 4/2)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良好	常滑
21-23	甕	口縁	外 灰(7.5Y 4/2) 内 灰オリーブ(5Y 4/2)	きめ細か。	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良好	常滑
21-24	甕	口縁	外 灰オリーブ(5Y 4/3) 内 オリーブ黒(5Y 6/4)	きめ細か。	外 灰褐 口縁端 ヨコナデ 内 灰褐	良好	—

表2 須恵器観察表（第20図）

図面番号	器種	部位	色調		胎土	焼成	調整			備考
			内面	外面			外面	内面	底部	
① 甕	胴部	灰 (5Y 6/1)	灰白 (2.5Y 7/1)	きめ細か。 わずかに粗砂 粒を含む。	良好	格子目叩き	ナデ	—	—	
② 甕	胴部	灰黄 (2.5Y 7/2)	黄灰 (2.5Y 6/1)	きめ細か。 わずかに粗砂 粒を含む。	良好	格子目叩き	ナデ	—	—	
③ 甕	胴部	灰 (5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	きめ細か。 砂粒は殆んど 含まない。	良好	平行叩き	叩き	—	—	
④ 甕	胴部	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	きめ細か。 砂粒は殆んど 含まない。	良好	叩き	叩き	ナデ	—	
⑤ 甕	胴部	灰 (7.5Y 6/1)	オリーブ黒 (5Y 3/1)	きめ細か。 砂粒は殆んど 含まない。	良好	叩き	叩き	—	—	
⑦ 甕	底部	灰白 (2.5GY 8/1)	灰(10Y 5/1)の 部分と灰オリーブ (7.5Y 6/1)が 半分ずつ混	きめ細かく。 砂粒は殆んど 含まない。	良好	ヨコナデ 輪	ヨコナデ 自然輪	およそ 12.00cm	—	

### 第3節 小 結

林遺跡水田面の灌漑施設は、昭和28年以來より整備された岩熊井堰からひかれた灌漑用水路によっているが、それ以前は遺跡北側低丘陵に設けられた“鯨池（くじらいけ）”等と呼称されるため池による灌漑であったといわれている。今回の調査で確認された畦畔遺構は、この“ため池”による灌漑のおこなわれていた時期の遺構であると考えられるが、畦畔に付帯する小水路遺構は検出していない。

\*伊副形。の“いがた”。はおそらく“潟”。からきた字名であり、土層の観察からも地表1.0m以下は貝殻混じりの海性砂層となっており、近代まで汀線にちかい環境にあったことが窺われる。実際にはほんの最近まで現在水田が営まれている低地面まで潮のあがることがしばしばあって、一帯には鴨原（かもはら）という呼称が近年までのこっていた。調査地より約500m北に位置する石田地区では天正年間頃まで干潮時でなければ山麓をも通過できなかったほどで、毎年大潮のときは被害を出したと伝えられている。また、本遺跡から約800m東に位置する低丘陵にある越路（こえじ）遺跡からは峠神の信仰と関わりをもつといわれる子持勾玉（ねだりくわい）が出土しており、往時の路はこの沼沢にちかい低地面を避けて、上伊形地区にむける低丘陵の峠道を常用したものと考えられる。

当時の遺跡周辺環境を以上のように推測するが、では実際に何時頃から水田耕作地として利用されはじめたかといえば、上述のように天正年間頃までは到底稻作が行える土壤環境ではなく、早くとも17世紀に入ってのことであろうと推定され、これは水田最下層の出土遺物とも合致している。

現在までに水田遺構として調査されている遺跡は3例がある。そのなかでもっとも古い例（註4）である浮ノ城遺跡では、大淀川河口付近の起伏に富んだ砂地に点在する不定形の低湿地（後背地）と推定される個所に自然地形を改變しない、水田形態としては原初的な不定形水田が営まれていたと考えられて溝、畦畔状遺構が確認され、弥生中期中葉から後期前半期のものとされている。もう一例は、宮崎学園都市遺跡群にある前原南遺跡で、ここでは谷底低地地形に営まれていたと推定される水田から、トレンチ断面より畦畔状の盛り上がりが、また、人の足跡の痕跡が検出されており、周辺の遺物から弥生後期から古墳初頭期のものとされている。両遺跡ともに調査の性格上、広域で面的な調査はなされていないので、水田一筆単位の規模や水利関連施設まで明らかにできていない。3例めは、宮崎市大字島之内に所在する保木下（ほきのした）遺跡で、日向灘にむかって東流する二級河川石崎川の一支流新名爪川（にいなづめがわ）の北岸下流に位置するもので約1500m<sup>2</sup>の発掘区に長短19本の畦畔、2本の水路や裏作の畝うね跡と推定される縞模様状遺構が検出されている。これらの遺構によって、

水路及び小水路を湧水して水田面に取水する流下灌漑が確認された。保木下遺跡の水田遺構の時期は水田面出土の遺物により中世末～近世と推定でき、今回調査の林遺跡のそれより、やや古手となる。

保木下遺跡の調査によって、古水田跡上面に異層のがらまない土層上においても土壤色調の相違(鉄分の沈着度合)、土壤の硬軟度合によって畦畔の検出が可能であることが明らかとなっていたが、本遺跡の調査はその一例を如実に示すものとなった。

註1. 岩熊井堰。享保年間、延岡藩(牧野氏)家老藤江監物、郡奉行江尻喜多右衛門によって構築された五ヶ瀬川にかかる井堰であり、これから延約10kmの用水路が導れ131町余をうるおした。享保19年(1734)完成。

註2. 柳田竜太郎。『元伊形郷土誌』。昭和12年

註3. 延岡市社会教育センター資料室所蔵。『延岡市古代資料収藏目録』。延岡市教育委員会。昭和61年

註4. 「浮ノ城遺跡」。吉村第二土地地区画整理事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書。宮崎市教育委員会。昭和61年

註5. 「前原南遺跡」。『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集』。宮崎県教育委員会。1988

註6. 「保木下遺跡」。新名爪川小規模河川改修事業に伴なう埋蔵文化財調査報告書。宮崎県教育委員会。1986

## 第Ⅲ章 第2・3次調査

### 第1節 発掘調査の経過

第3次調査は、第2次調査の時点で未買収地として、空白の残地とせざるをえなかった1200m<sup>2</sup>について実施したものであり、2次調査の完結としての第3次調査という位置付けであるため、本章において一括して取り扱う。

発掘調査の経過について、調査日誌からの抜粋で記す。

#### 第2次調査（1987年）

- 10月26日 器材搬入。発掘区域について建設省と現地打合せ。  
10月28日 柱穴多く認める。青磁片と旧石器の剥片を検出。  
10月30日 ナイフ形石器出土。但し出土層は明瞭ではない。他柱穴を中心にヘラ切り土師質土器出土。A地区で焼石検出。  
11月10日 黒曜石出土。  
11月16日 平板によりピット群実測。  
11月18日 ピット群掘下げ  
11月25日 B地区ピット群掘下げ、およそ80m終了。  
12月1日 特別調査員外山秀一氏現場に入る。基本層位及び地形形成について調査、検討を行う。  
12月2日 古手の須恵器壺蓋、壺身片を検出。近くの伊形小学校の2クラスが見学。  
12月3日 柱穴の検討。掘立柱建物の見通しがつく。  
12月8日 掘立柱建物を石灰で表示し、写真撮影。測量作業。  
12月15日 旧石器層について追及するが、包含層まで削平され耕作土下に旧石器の遺物が包含されたものとみなすしかない。  
12月18日 A・B調査区最終確認。調査終了。

#### 第3次調査（1988年）

- 1月9日 器材搬入。  
1月17日 表土剥ぎ完了。柱穴一部掘下げ。  
1月24日 昨年度の岡面から柱穴の続きを確認。測量杭等の復旧。  
1月25日 A区、旧石器を追及精査。

- 1月27日 柱穴の遺物取り上げ及び測量実測。
- 2月2日 石灰により掘立柱建物表示。
- 2月3日 写真撮影。
- 2月13日 前日の建設省に引き続き、延岡市土木課、社会教育課とバイパス建設によって生じる農道改良に伴う発掘調査について協議。
- 2月14日 調査終了。

## 第2節 旧石器時代

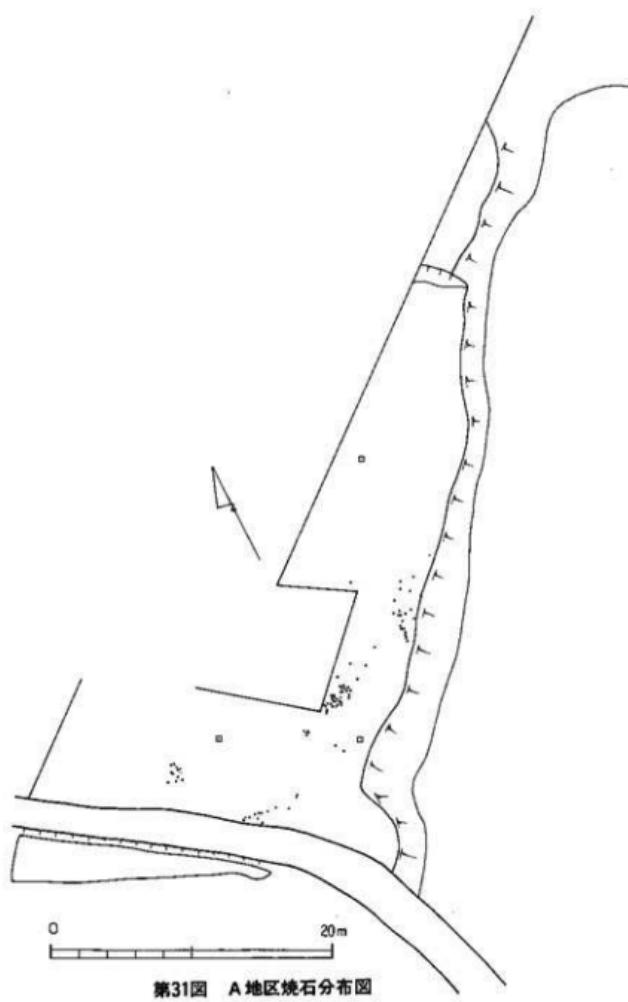
### 1. 遺構及び包含層の状態

第2次調査の発掘開始そうそうB区においてナイフ形石器の出土をみたが、その後の掘下げにかかわらず旧石器時代遺物の検出は、数点の剥片にとどまり面的な確認にいたらなかった。比較的層位的に安定していると考えられるA区では逆に、剥片の集中した出土と焼石群（第31回）の検出はみたが、製品の出土がなかった。この検出された焼石群は、3箇所ほど集中化した部分があるが、いわゆる集石遺構としてまとまった遺構ではなく、全体としては希薄な散布にとどまっている。調査地は畑開墾のため古くからの開削が進んでおり、より開削のすんだB区で、第1・第2次調査のさい耕作土中から検出されたナイフ形石器類は、上段あるいはB区の削平土中に含まれていたものと考えられる。

また、外山氏との地理学的調査から、A区耕土直下に比較的土壌化の進んだアカホヤ火山灰層があり、剥片類はその下に包含されるが、以下第二オレンジ（AT



第30図 基本土層図



第31図 A地区焼石分布図

層)を含む土層はさらにローム化が進み第二オレンジ(AT層)との層位関係を解明することはできなかった(第30図)。

第3次調査は、第2次調査区の西側路線範囲までを継続して実施した。

## 2. 遺物

ナイフ形石器(第37図1・2)は、2点出土している。共に横長剥片を素材とし、一侧縁に丁寧な刃溝と調整が施されている。材料は祖母・傾山系に産するとみられる無斑晶流紋岩である。

尖頭器は、3点の出土である。圭頭的な小型の尖頭器(第37図3・4)と剥片尖頭器(第37図5)がある。

その他、石核及び剥片があるが、材料は無斑晶流紋岩である。

第3次調査の石器では、搔器(第38図6)の存在が注目される。

## 第3節 古墳時代

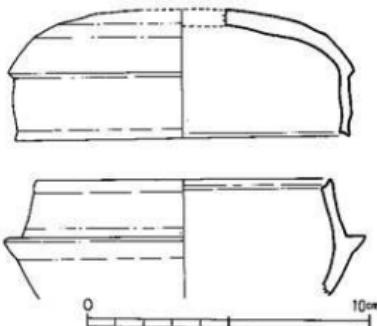
### 1. 遺構

第1次調査では、不整形ながら竪穴状の遺構の検出をみたが、第2・第3次調査では、遺物の出土は認められたものの、遺物の属する遺構は、密集したピットなどにより乱され状態が悪く判然とせず、顕著な遺構は検出されなかった。

### 2. 遺物

一次調査では3点の土師器の高坏が出土したが、二次調査では同形式の高坏(第39図2)と共に伴するかたちで破片ながら須恵器の蓋坏、坏身(第32図1・2)が出土している。

蓋と身はセットで、延岡市でこれまで確認されている須恵器としては最も古いもので、現在の県内の編年ではI期に相当する。身の口径は10cm、受け部の立ち上がりは高く、やや内傾している。蓋の口径は11cm、縁は明瞭である。蓋・身とも口縁端部は内傾し段をもつ。



第32図 須恵器壺身・蓋実測図

青灰色を呈し、焼成は良好である。

一方、土師器の高壺は、壺部のみで脚部など不明であるが、口径24.6cmで、壺部の深さ8.5cmと深いタイプである。色調は、橙色ないし黄橙色を呈し、焼成は良好である。

#### 第4節 歴史時代

##### 1. 造構

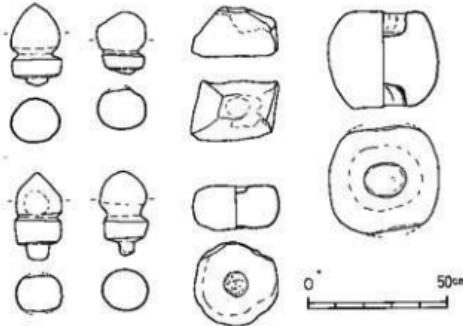
遺跡は狭い範囲ながら検出された膨大な柱穴群の存在を一つの特徴とする(第36図)。時期を決定する良好な資料に乏しいが、ヘラ切り底の壺あるいは内黒土師器の存在から、平安時代前半の10世紀頃を上限とするものと考えられる。しかし、以下に記すように柱穴に青磁片が伴うのをはじめとし、中心的に遺物の量の集中するのは14世紀から江戸時代後期に至るものである。

柱穴群の中で注目されるのは、直径約90cmの円形の柱穴では県内でも大きな柱穴で構成される掘立柱建物である。桁行5間、梁行3間の南北棟である(第44図2)。多数の柱穴の中から推定復元される掘立柱建物跡の中で、もう1棟の南北棟は桁行4間、梁行1間の建物である(第44図1)。

一方、東西棟には3タイプが認められる。1棟は大型の建物跡で、桁行5間、梁行2間で構成される(第45図1)。他は、やや小型で同規模ながら、桁行3間で梁行が1間もの(第45図2・3)と2間もの(第45図4)とが認められる。

これら掘立柱建物跡については、別章において考察したい。

また、造構ではないが、調査区内には地輪など原位置を留めるものではなかつたが五輪塔が残されていた。



第33図 五輪塔実測図

空風輪・火輪・水輪・地輪などいずれも比較的小型のものに限られている(第33図)。隣接の竹林にも多くの五輪塔が散乱しており、古く寺院が存在したとする伝承が地元に伝えられている。

## 2. 遺 物

青磁片の出土が目を引く。碗は、無文(第40図1・2)、雷文(第40図3・4)、蓮弁文(第40図5・6・15)などが認められる。これら青磁片の内、第40図13はSB4、第40図8はSB5、第40図3はSB8の柱穴からそれぞれ出土している。

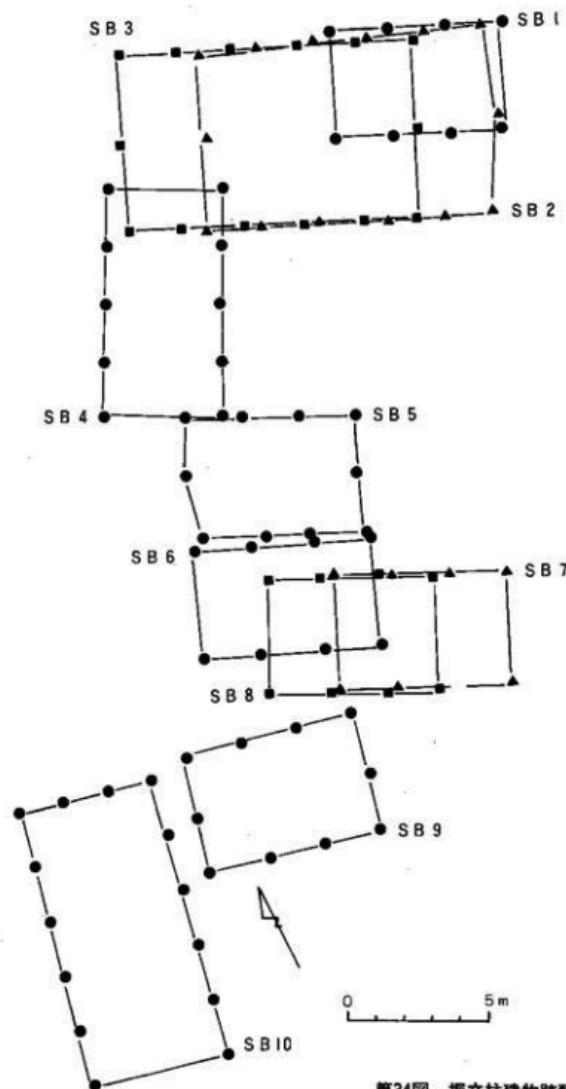
他に備前系の檜鉢(第42図15)、常滑焼き(第40図30)、土鉢(第43図1~29)、銅錢では「寛永通宝」(第43図32)、石臼(第43図30)、凹石(第41図14)などがある。

## 第5節 小 結

林道跡の地理的な立地条件についての最も大きな課題は、出土したナイフ形石器の時期に、同地がどのような地理的条件下にあったかである。海岸線の復元、および河川流路の復元などは1万数千年前の生活を考える上で欠かすことができないが、独立丘陵とその前庭ともいいくべき遺跡部分について、土層の観察及び地形図上から推定されるのは、少なくともナイフ形石器の時期以前の段階で丘陵の南西部が大きく地崩れ現象を起こし、非常に変動の激しい土の動きを成すに至ったとみられる事である。

古墳時代については、延岡市での確認例では古手に属する須恵器の壺蓋、壺身及び深い壺部を持つ高壺の存在、及び1棟の竪穴住居跡から本遺跡の性格を推定するしかない。狭い地理的な立地条件とすぐ近くの遺跡である越路の子持ち勾玉の存在も含め、推定されるのは、撲点的な集落ではなく、中継地的な小集落が想定され、あるいは高壺の相対的な多さは祭祀的役割を示唆するものであろうか。

中近世の掘立柱建物については、第3次調査をもってようやく全容が明らかとなったが、遺物の上からの時期決定に問題を残しているものの柱間の間隔の違いにより、別章に述べるように、おおむね3種のパターンを見い出すことができる。また、これらの掘立柱建物跡の柱穴は、これまでの県内での調査例の中でも大きな部類に属し、その意味からいわゆる「伊富形莊」との関係も含め、地域における中核的な役割を想定しておきたい。



第34図 据立柱建物跡配置模式図

#### 第IV章 振立柱建物跡の建築尺度について

無数の柱穴の中から、建物跡として復元し得たのはわずかに10棟である。その他の柱穴の多くはしっかりしたものであり、振立柱建物を構成するものには違いないが、推定することが出来なかった。

南北棟2棟、東西棟8棟である。南北棟の2棟のSB4、SB10は、わずかに軸線がずれている。また、柱間は、共に桁行方向では2m等間が採用されているが、梁行方向ではSB4が中間に柱を持たず1間4mで基本的には2mが基準間隔であるのに対して、SB10の北側梁行は3間で柱間1.6m等間を採用している。

東西棟では、SB2とSB3が同じ形式を持つ建物である(第35図1)。桁行5間、梁行2間で、桁行での柱間2.1m等間、梁行での柱間3.2mで基本的には1.6mが基準間隔である。この2棟の建物は、継承され踏襲され立替られたものとみられる。

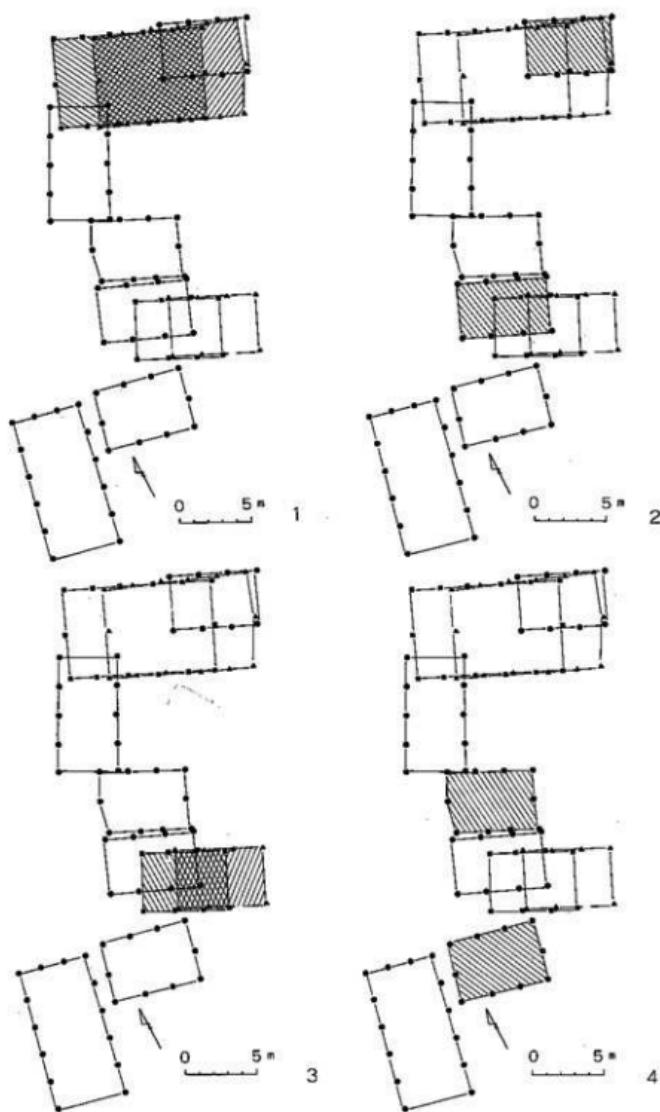
SB1とSB6も同じ形式を持つ建物である(第35図2)。桁行3間、梁行1間で、桁行方向が2.1m、梁行方向が4mの間隔とする。

次に、SB7とSB8が同じ形式を持つ建物である(第35図3)。桁行3間、梁行1間で、桁行方向が2m、梁行方向も2mを間隔とする。この2棟の建物も、継承され踏襲され立替られたものとみられる。

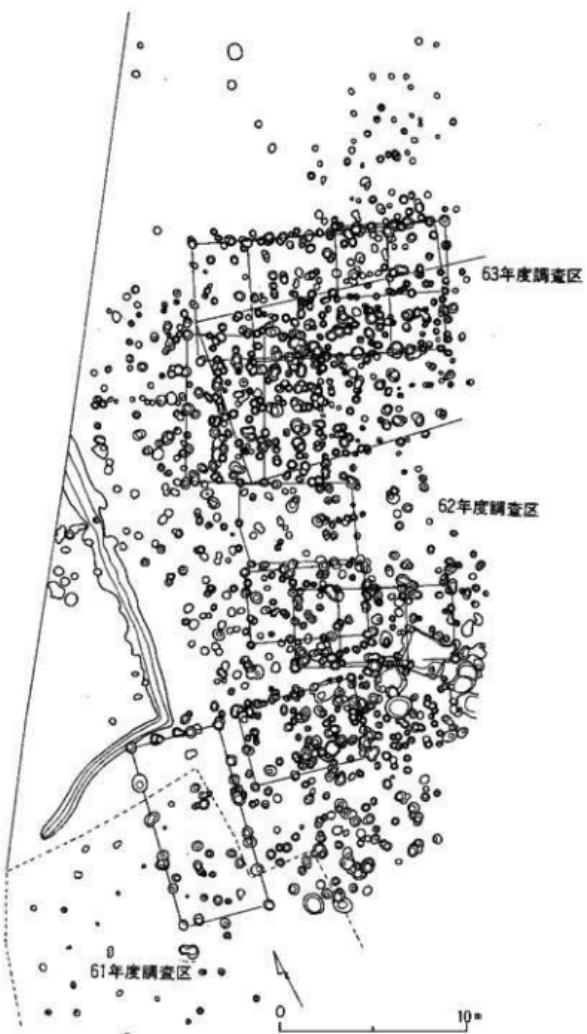
また、SB5とSB9が同じ形式を持つ建物である(第35図4)。桁行3間、梁行2間で、桁行方向が2m、梁行方向が2.1mを間隔とする。

こうして見て行くと、本遺跡の振立柱建物跡に採用されている間隔には3種があることが知られる。2.1m、2m、1.6mである。ことに梁行で1間ものであると2間ものであるとに係わらず基準間隔が桁行と異なるものは普遍的にみられる。梁行、桁行共に2mという統一された間隔を採用するのは、南北棟のSB4、東西棟のSB7・8のみである。他は、2.1mと1.6mの組み合わせ、2mと2.1mの組み合わせがみられる。

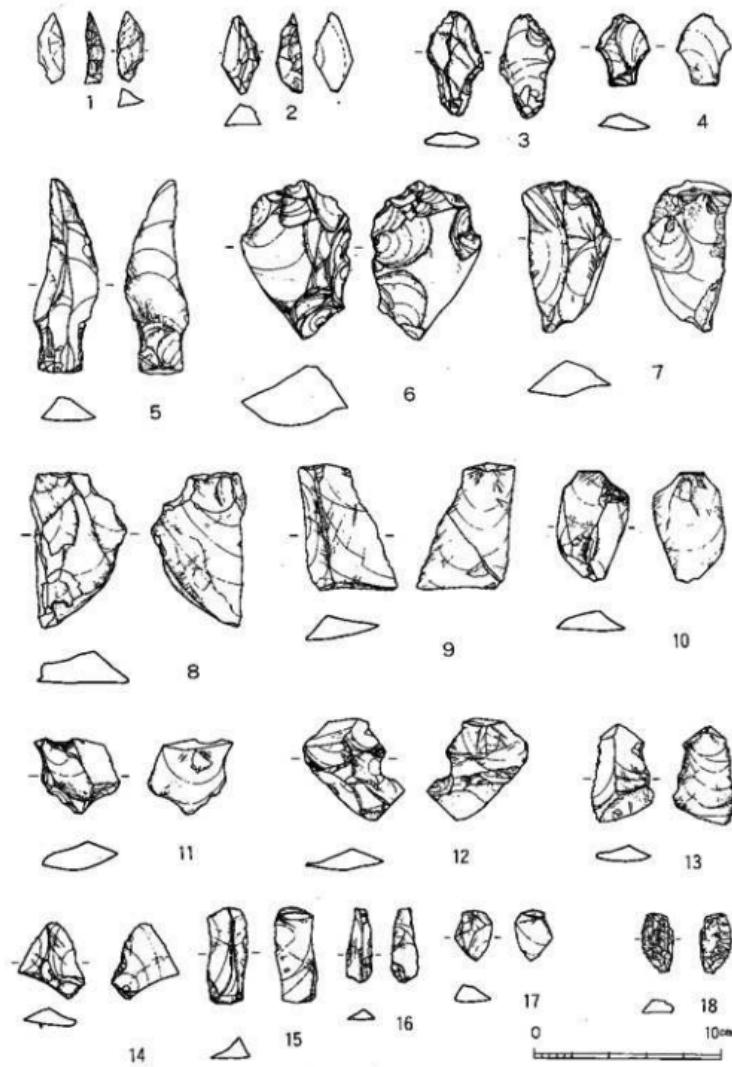
それぞれの建物跡の時期を、遺物の年代観で押さえられない弱点はあるが、こうした間隔の違いが採用されていることは、遺構上から指摘出来るであろう。



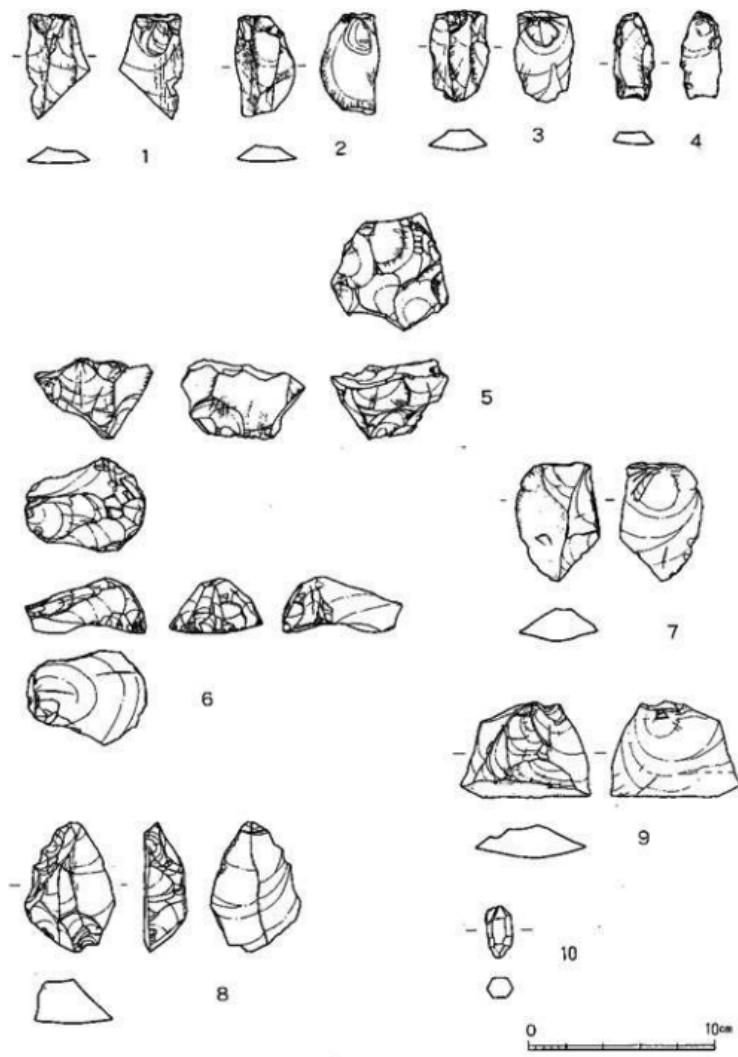
第35図 捏立柱建物跡タイプ別配置図



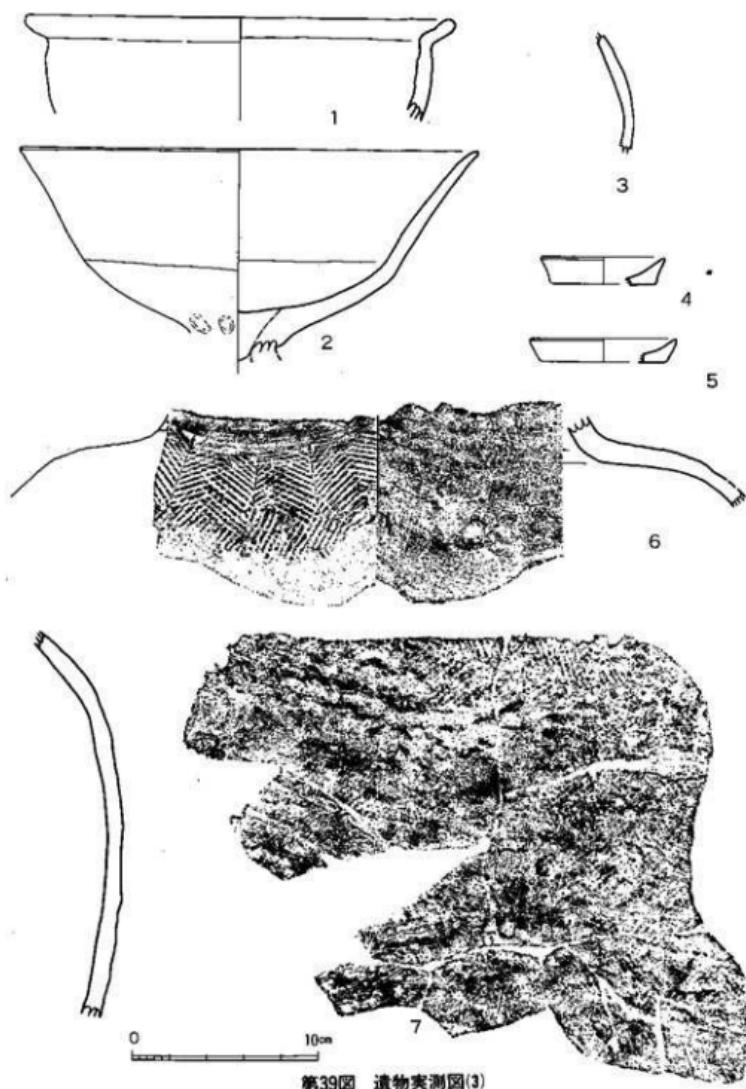
第36図 掘立柱建物跡群遺構実測図



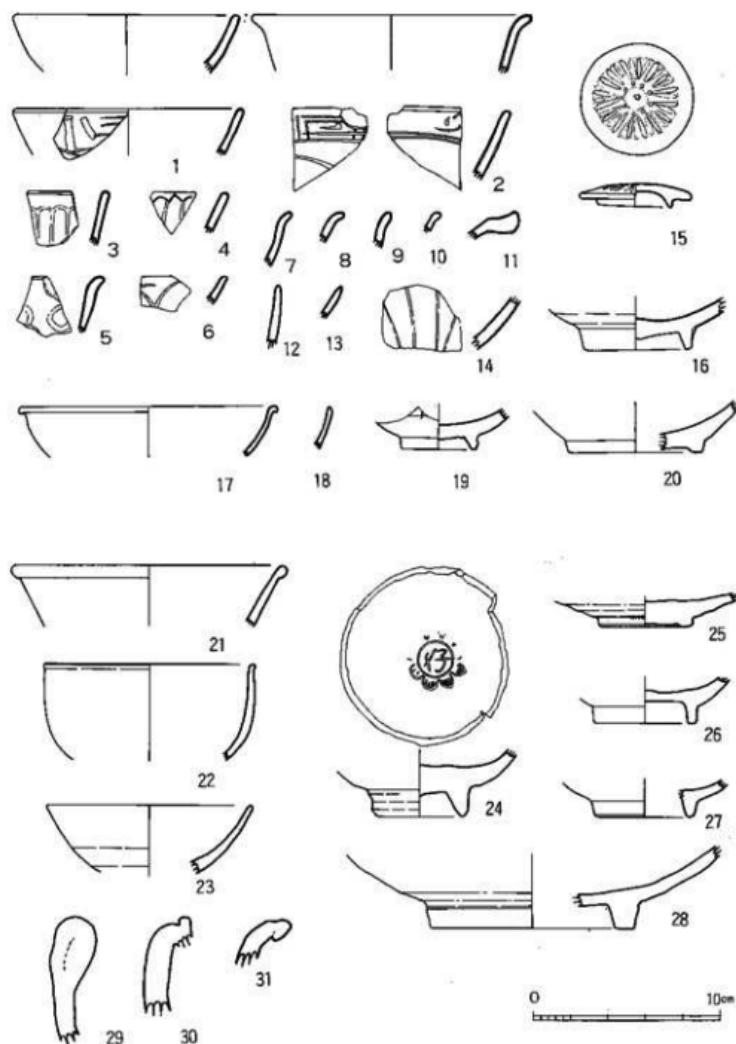
第37図 遺物実測図(1)



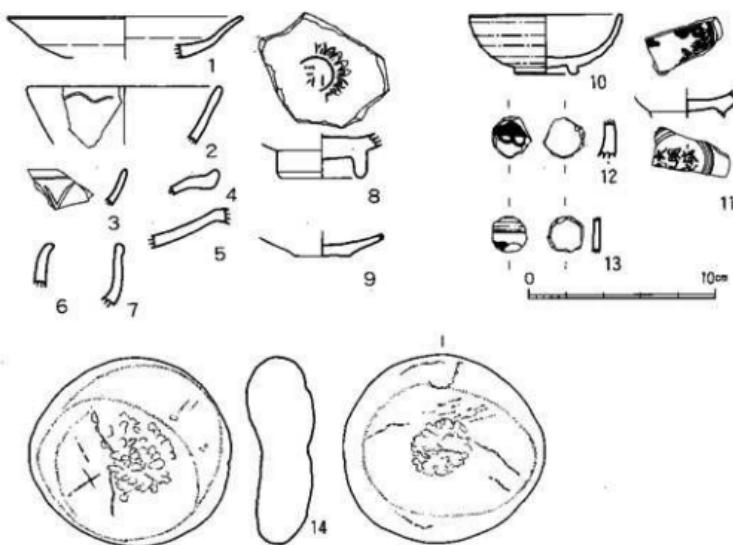
第38図 遺物実測図(2)



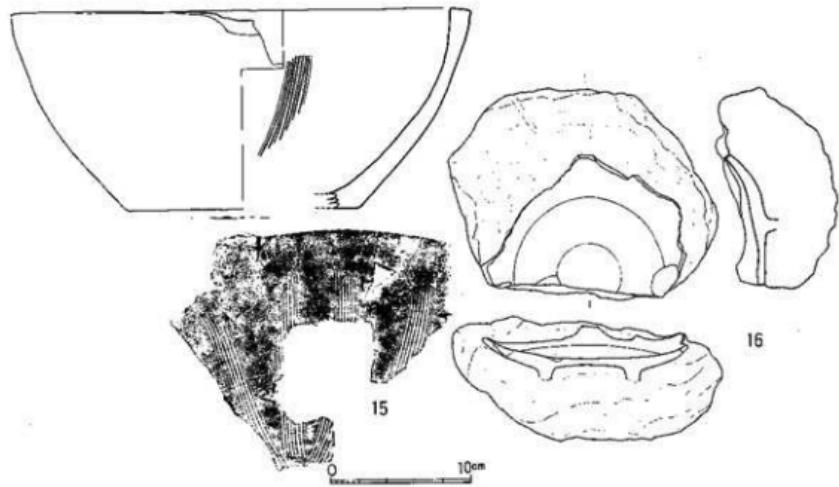
第39図 遺物実測図(3)



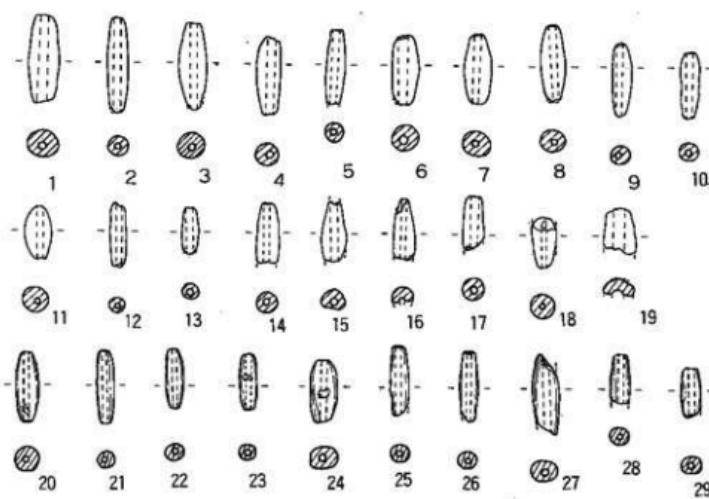
第40図 遺物実測図(4)



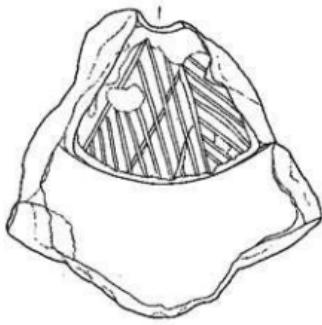
第41図 遺物実測図(5)



第42図 遺物実測図(6)



31

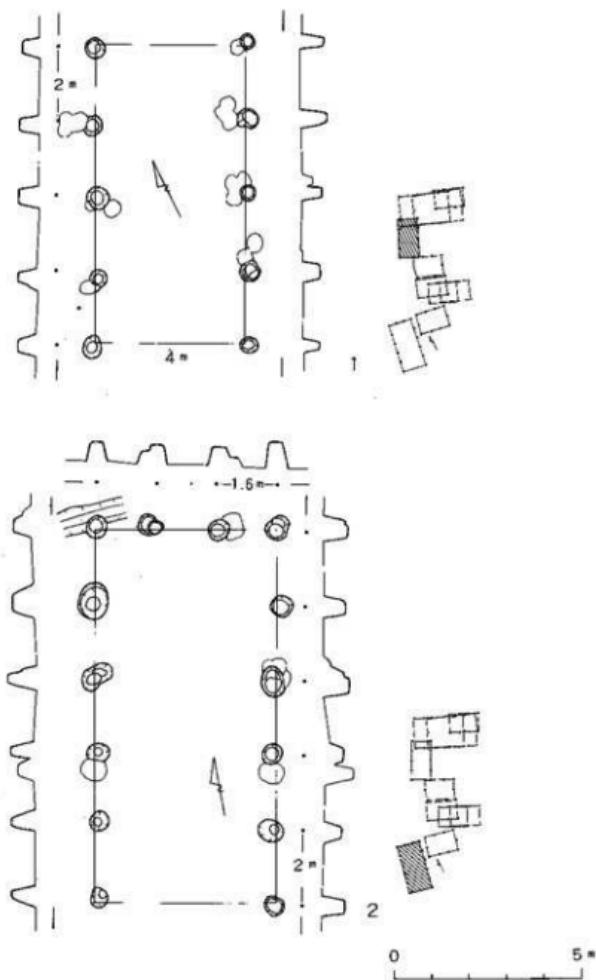


30

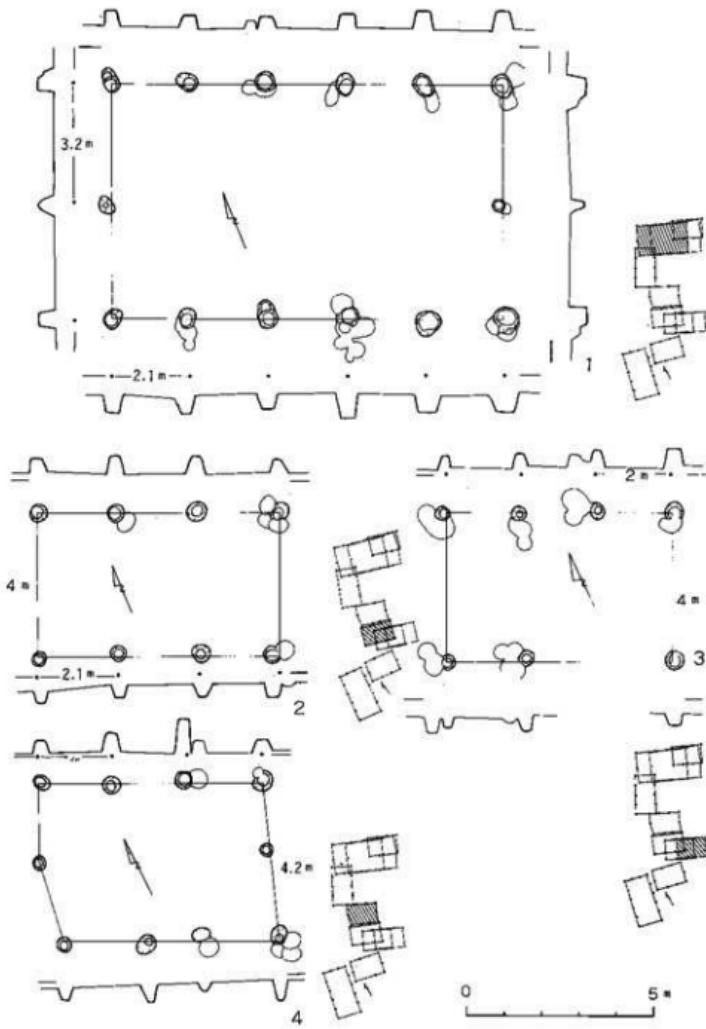


0 10cm

第43図 遺物実測図(7)



第44図 据立柱建物跡実測図(1)



第45図 堀立柱建物跡実測図(2)

# プラント・オパール分析結果報告書

土々呂バイパス建設関係

—林 遺 跡—

古 環 境 研 究 所

〒330 埼玉県大宮市内野本郷1089-10

昭和62年1月

## 1. 分析法

プラント・オパールとは、植物の細胞で形成されたガラス質の鉱物のことと、植物学的にこれを「植物珪酸体」とよんでいる。

植物珪酸体は、主にイネ科植物（イネ、ヒエ、ススキ、ヨシなど）の葉身で形成され、その形態は植物種によって固有である。また、宝石のオパールとほとんど同じ組成をしており、化学的に安定であるため、微化石として半永久的に土壤中に残っている。

この微化石を遺跡土壤などから検出し、植物の種類を同定したり、その量を測定する方法を「プラント・オパール分析法<sup>1,2)</sup>」とよんでいる。

古環境研究所では、主に機動細胞に由来するプラント・オパールについて研究、分析を行なっている。

定量分析はガラスピース法<sup>3)</sup>により、次の手順で行なった。

一ズ法<sup>4)</sup>により、



このようにしてイネのプラント・オバール密度を測定していくと、水田跡が埋蔵されている層にピークが現れるのが通例である<sup>5,6)</sup>。

通常、イネのプラント・オバール密度が5,000個/cc以上の場合に、水田跡の可能性があると判断している。

つぎに、プラント・オバール密度に下記の換算係数（機動細胞珪酸体1個に対する植物体乾量）を掛けて植物体の生産量<sup>4)</sup>を算出した。

表1 各植物の換算係数

(単位:  $10^{-5}$  g)

植物名	葉身	全地上部	種実
イネ	0.51	2.94	1.03
ヒエ	1.34	12.20	5.54
ヨシ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ススキ	0.38	1.24	—

## 2. 分析結果

イネ、キビ族(ヒエなど)、ヨシ属、タケ亜科(竹笹類)、ウシクサ族(ススキなど)について同定・定量を行ない、数値データを表2、表3に示した。また、イネ、ヨシ属、タケ亜科の植物体生産量を図1にグラフで示した。

これらの結果から4層水田址の分布域を推定し、図2に示した。

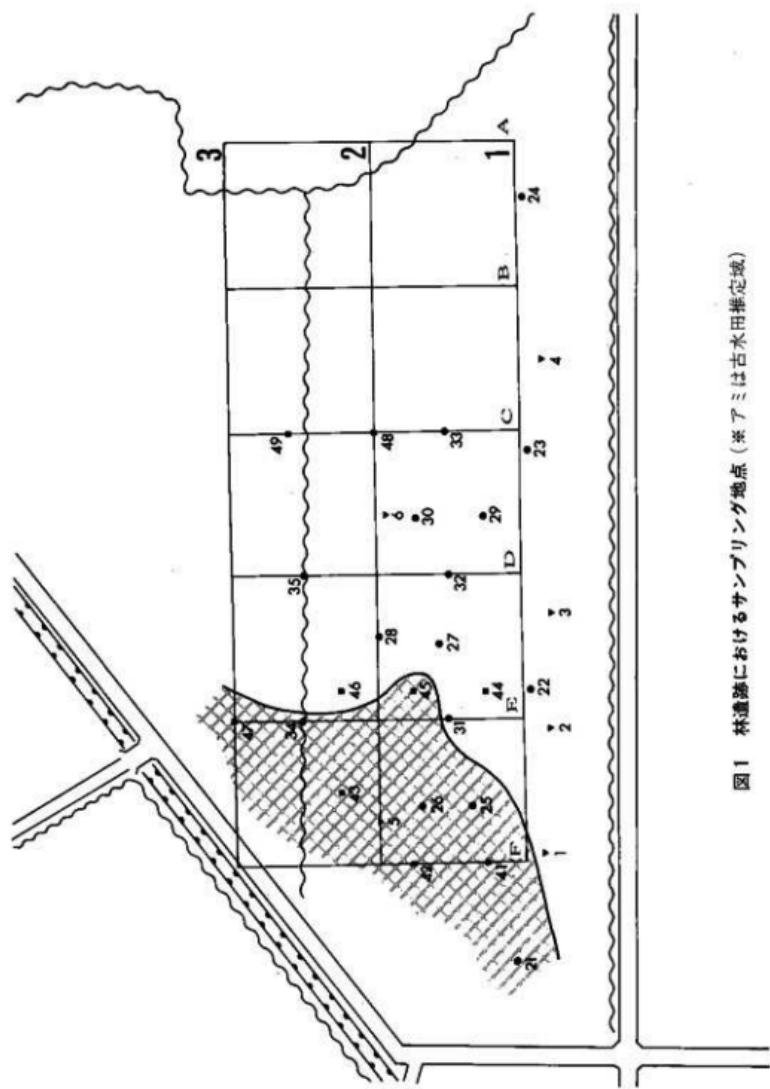
## 3. 所 見

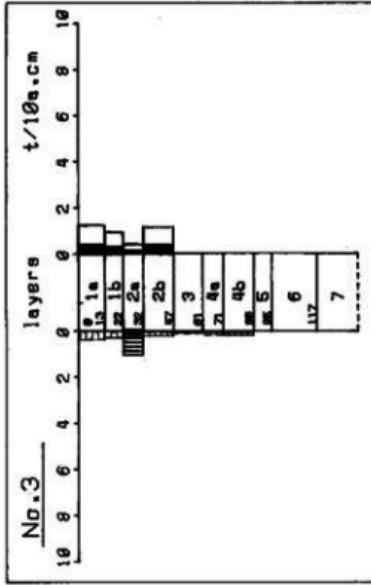
- (1) 1層～3層からは、多量のイネ機動細胞プラント・オバールが検出され、この地でイネが栽培されたものと判断される。また、その栽培様式は地形等からみて大半は水田作と思われるが、一部で畠稲作の可能性が考えられる部分もある。
- (2) 調査域の西側で、4層からイネが検出される部分がある(図2傾斜部)。この部分では比較的古い時期に水田が営なまれていた可能性が大きい。
- (3) 5層以下は自然の低湿地とみられる植生様相であり、7層(砂層)堆積時には海水が関与したものと判断される。

#### ◎参考文献

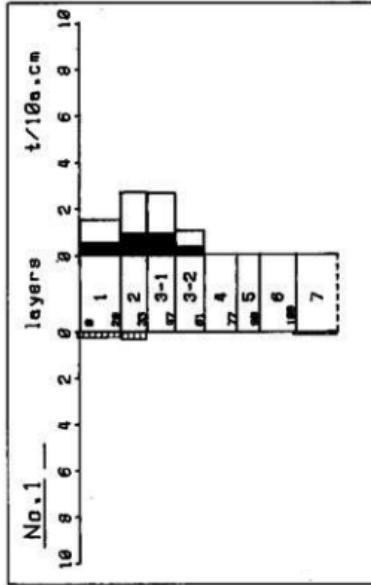
- 1) 藤原宏志(1976)：プラント・オパール分析による古代栽培植物遺物の探索、考古学雑誌 62, 148-156
- 2) 藤原宏志(1976)：プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) — 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学 9, 15-29
- 3) 藤原宏志・佐々木章(1978)：プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) — イネ科(*Oryza*)植物における機動細胞珪酸体の形状—、考古学と自然科学 11, 9-20
- 4) 藤原宏志(1979)：プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) — 福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa L.*)生産総量の推定—、考古学と自然科学 12, 29-41
- 5) 杉山真二・藤原宏志(1984)：プラント・オパール分析による水田址の探査、那珂君体遺跡 II、福岡市埋蔵文化財調査報告書(福岡市教育委員会)第106集, 5-9, 11-14
- 6) 藤原宏志・杉山真二(1984)：プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) — プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学 17, 73-85

図1 林道跡におけるサンプリング地点（添字は古水田堆定域）

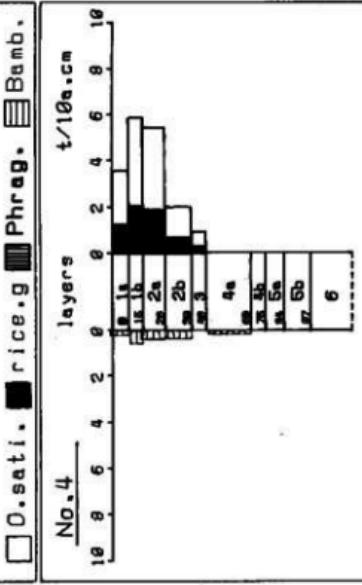




□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.



□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.



□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.

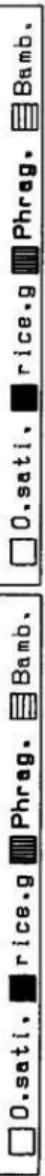
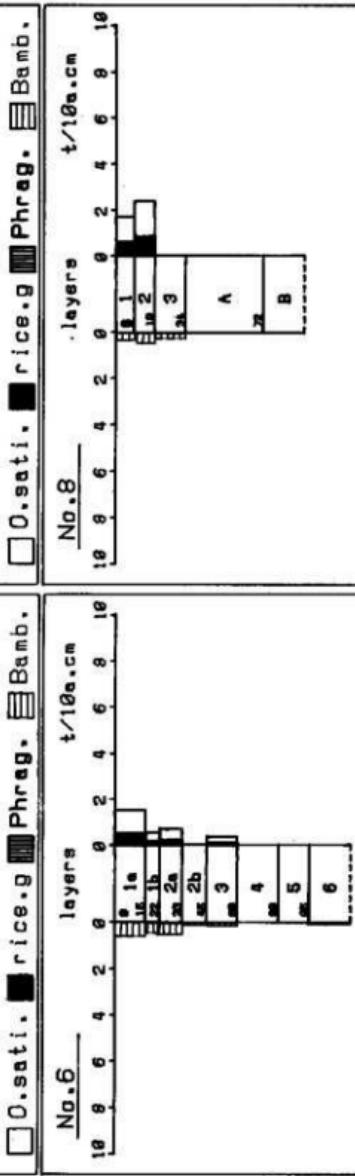
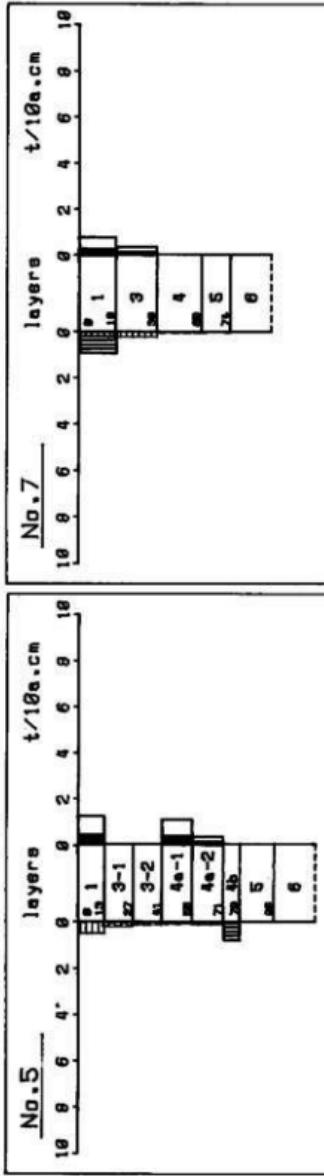


□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.

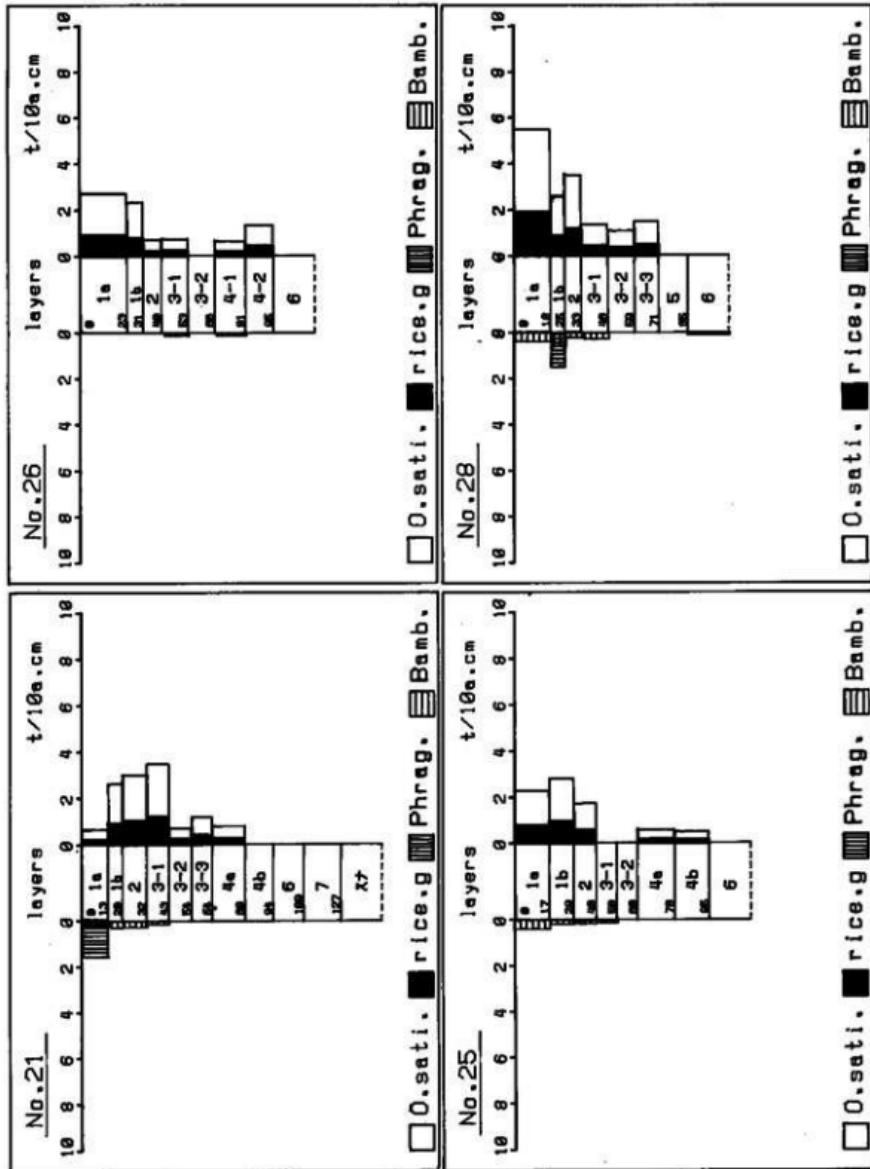


□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.

11/7 '85



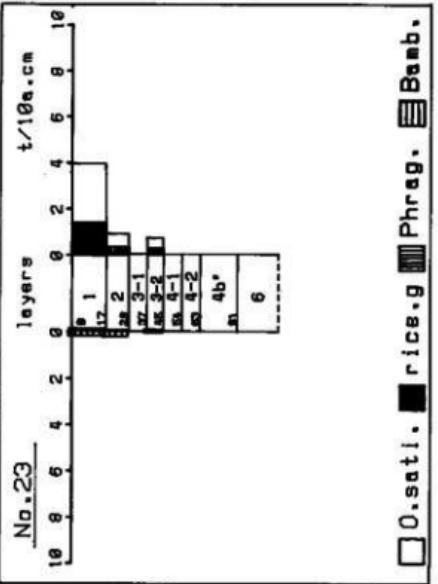
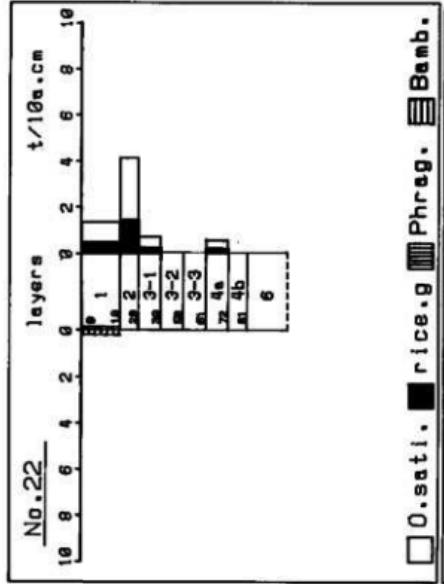
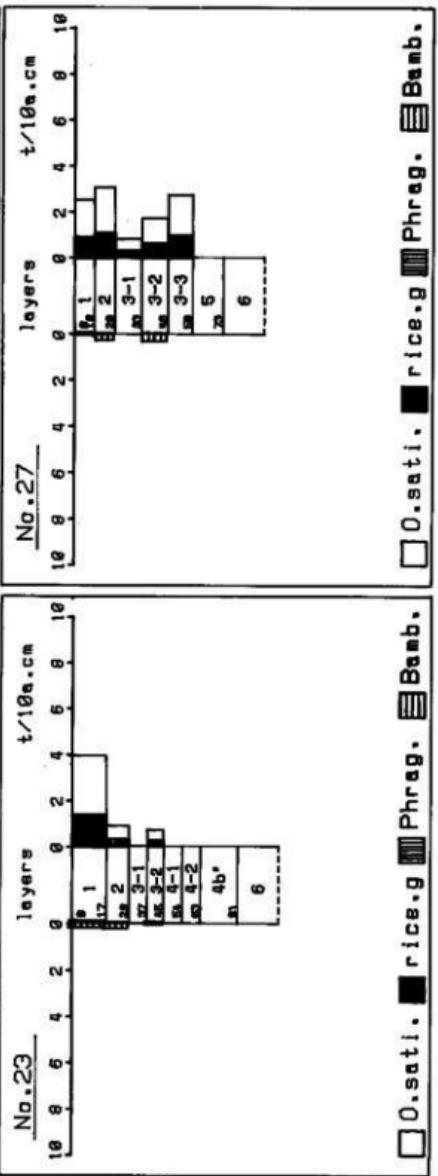
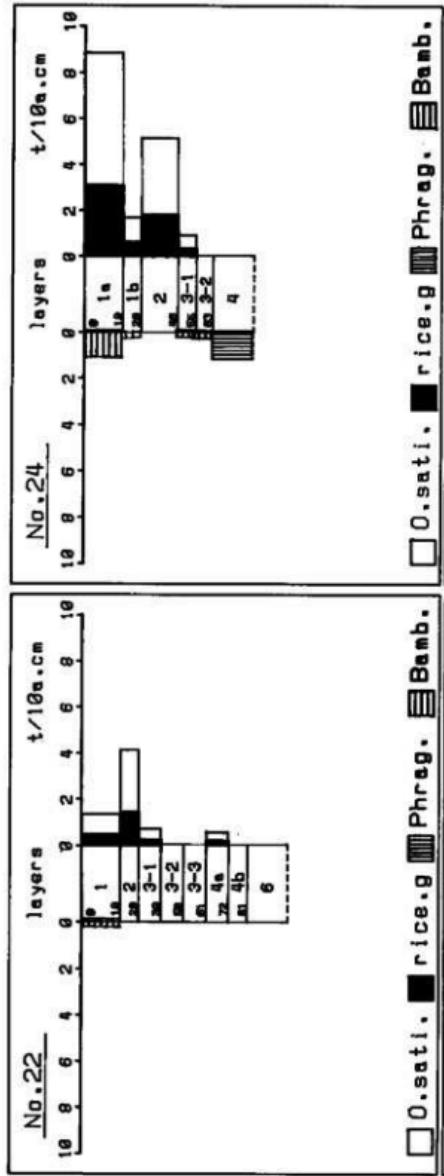
/ヘ"オカ ハロハ"ハ" 11/7 '85



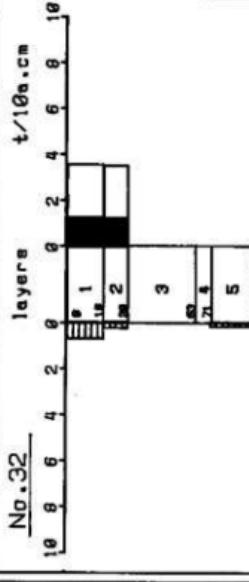
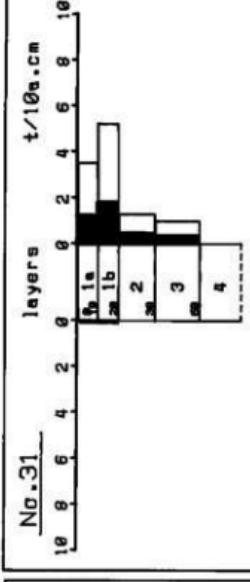
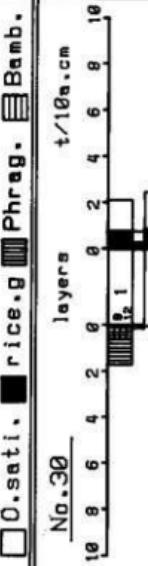
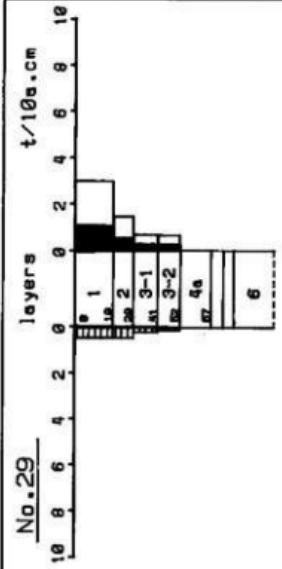
□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ▢ Bamb.

□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ▢ Bamb.

4/25 '86



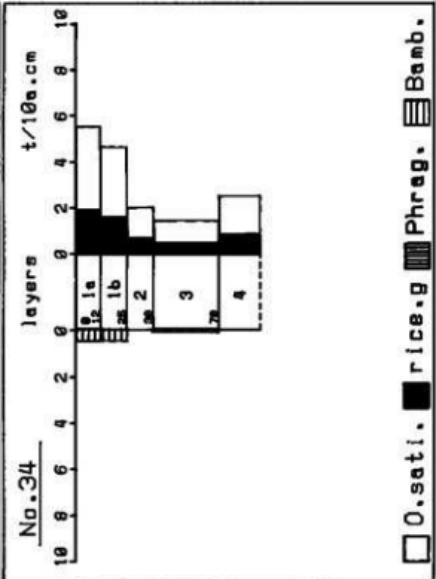
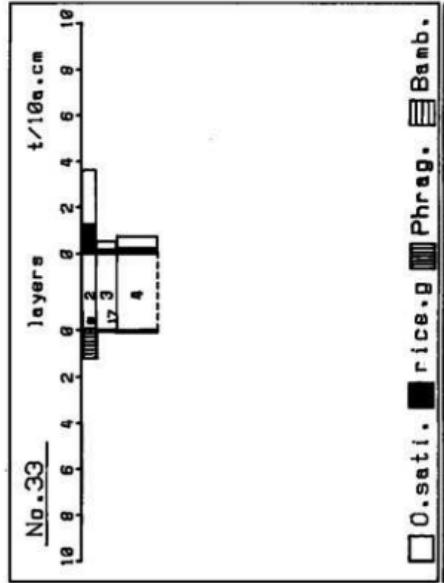
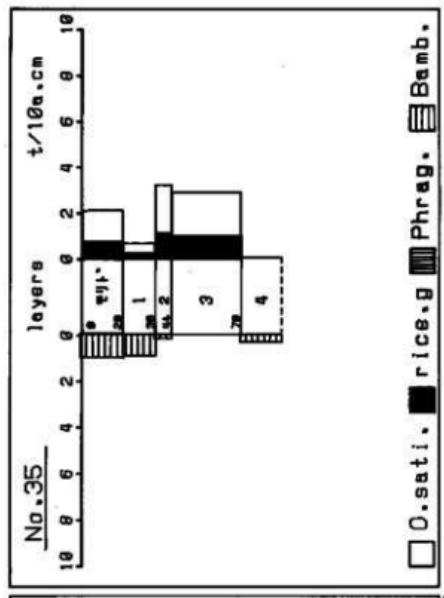
ノヘ・オカ トトロア・イハ・ズ 4/25 '86



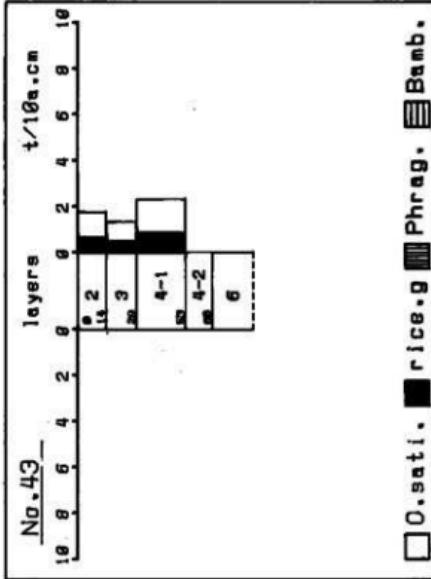
□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.

ノヘ才力 ハトロハ"ハハ"ズ 4/25 '86

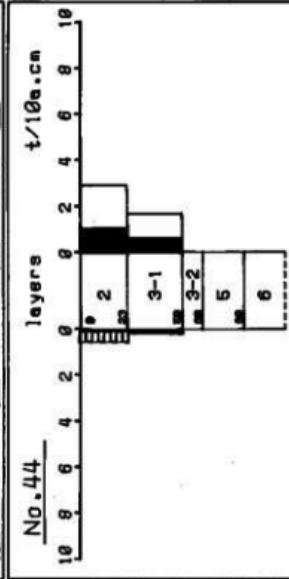
□ O.sati. ■ rice.g ▨ Phrag. ┌ Bamb.



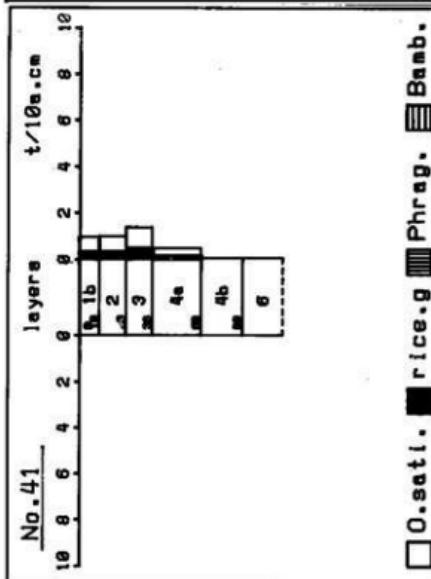
ノヘ・オカ トトロハ・イハ・ズ 4/25 '86



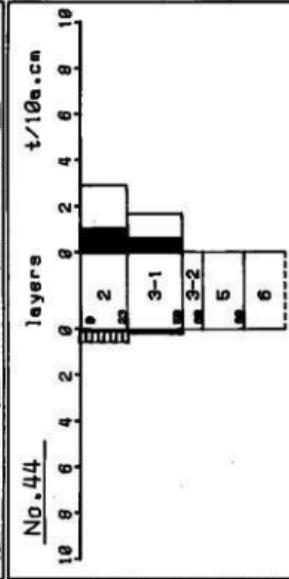
□ O.sati. ■ rice. ♦ Phrag. └ Barb.



□ O.sati. ■ rice. ♦ Phrag. └ Barb.

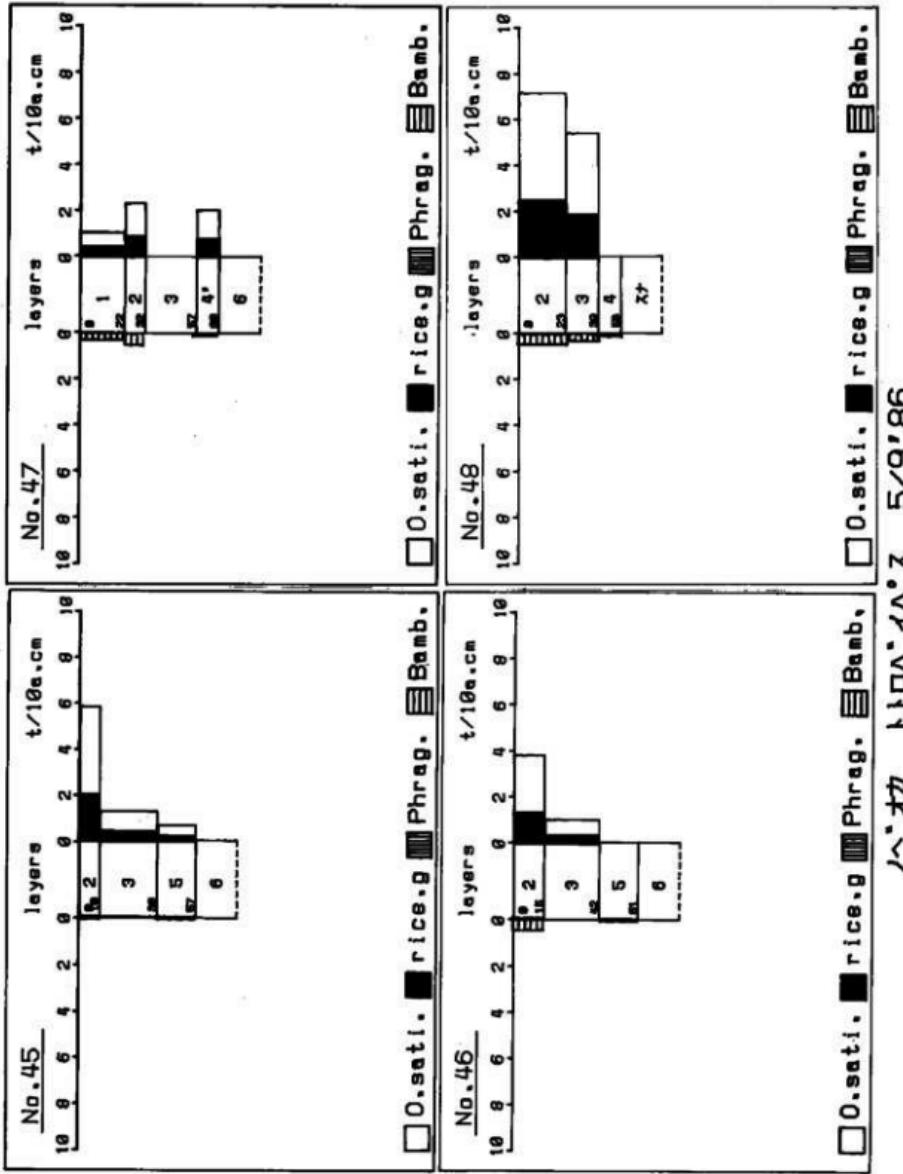


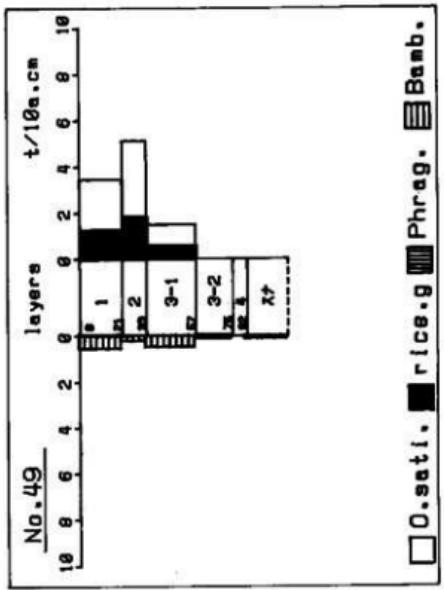
□ O.sati. ■ rice. ♦ Phrag. └ Barb.



□ O.sati. ■ rice. ♦ Phrag. └ Barb.

ノヘ・オカ  
トヨタ・ヤマツ  
5/9'86





ノヘオカ トロバヤハズ 5/9'86

延岡：土々呂バイパス 遺跡における  
プラント・オバール定量分析結果

吉崎大学農学部 農作業管理学研究室

No. 22 地点 4/25 '86 サンプリング

層名	植物体乾重 (t/10a, cm)						
	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケモ科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1	1.329	0.466	2.758	1.253	0.000	0.326	0.841
2	4.114	1.441	3.414	1.550	0.000	0.403	1.735
3-1	0.719	0.252	0.000	0.000	0.000	0.235	0.303
3-2	0.000	0.000	2.663	1.209	0.000	0.314	0.541
3-3	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.321
4a	0.553	0.194	2.294	1.042	0.000	0.000	0.233
4b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.321

No. 23 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケモ科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1	3.935	1.379	9.798	4.449	0.000	0.257	0.664
2	0.915	0.321	11.407	5.180	0.000	0.299	0.000
3-1	0.000	0.000	6.282	2.853	0.000	0.000	0.319
3-2	0.734	0.257	0.000	0.000	0.000	0.120	0.310
4-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.680
4-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
4b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

No. 24 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケモ科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1a	8.817	3.089	7.318	3.323	0.000	1.152	0.372
1b	1.719	0.602	3.567	1.620	0.000	0.281	1.813
2	5.112	1.791	4.242	1.926	0.000	1.001	1.725
3-1	0.912	0.319	3.784	1.718	0.000	0.298	2.308
3-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.354	0.304
4	0.000	0.000	0.000	0.000	1.139	0.079	0.204

## No. 27 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1	2.523	0.884	0.000	0.000	0.000	0.103	0.798
2	3.056	1.071	0.000	0.000	0.000	0.333	1.719
3-1	0.832	0.291	0.000	0.000	0.000	0.000	0.702
3-2	1.750	0.613	0.000	0.000	0.000	0.381	0.738
3-3	2.750	0.963	7.606	3.454	0.000	0.000	0.773
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

## No. 41 地点 5/9 '86 サンプリング

番号	植物体乾量 (t/10 a. cm)						
	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1b	0.911	0.319	0.000	0.000	0.000	0.000	0.768
2	0.959	0.336	0.000	0.000	0.000	0.000	1.011
3	1.339	0.469	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
4a	0.455	0.159	1.888	0.857	0.000	0.000	0.576
4b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

## No. 42 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1b	2.529	0.886	0.000	0.000	0.000	0.103	0.267
2	0.664	0.233	0.000	0.000	0.000	0.108	0.560
3	2.928	1.026	4.861	2.207	0.000	0.000	0.000
4	1.270	0.445	5.268	2.392	0.000	0.000	0.178
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.099	0.000

## No. 43 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	1.788	0.627	1.855	0.843	0.000	0.073	0.566
3	1.359	0.476	2.819	1.280	0.000	0.000	0.860
4-1	2.329	0.815	4.832	2.194	0.000	0.000	0.737
4-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.098	1.017
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

## No. 44 地点

	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	2.879	1.008	0.000	0.000	0.000	0.470	0.911
3-1	1.680	0.588	0.000	0.000	0.000	0.091	1.417
3-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.235
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

## No. 45 地点

	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	5.807	2.035	3.012	1.368	0.000	0.119	1.837
3	1.273	0.446	5.281	2.398	0.000	0.069	0.895
5	0.697	0.244	2.892	1.313	0.000	0.114	0.882
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.400

## No. 46 地点

	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	3.775	1.322	0.000	0.000	0.000	0.493	0.637
3	0.992	0.348	2.059	0.935	0.000	0.000	0.628
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.119	0.919
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.339

## No. 47 地点

	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1	1.069	0.374	0.000	0.000	0.000	0.262	0.676
2	2.338	0.819	3.234	1.469	0.000	0.509	0.657
3	0.000	0.000	6.033	2.740	0.000	0.000	1.226
4	2.044	0.716	11.307	5.134	0.000	0.111	1.149
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

## No. 48 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	7.141	2.502	0.000	0.000	0.000	0.437	0.753
3	5.377	1.884	0.000	0.000	0.000	0.293	0.756
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.106	0.546
スナ	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

## No. 49 地点

	イネ (O.sati.)	イネ穀 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1	3.411	1.195	3.539	1.607	0.000	0.557	2.158
2	5.111	1.791	6.060	2.752	0.000	0.238	0.616
3-1	1.497	0.524	0.000	0.000	0.000	0.489	0.947
3-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.118	0.915
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
スナ	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.143	0.000

図 版



水田面遠景



畠地面より水田面を眺む



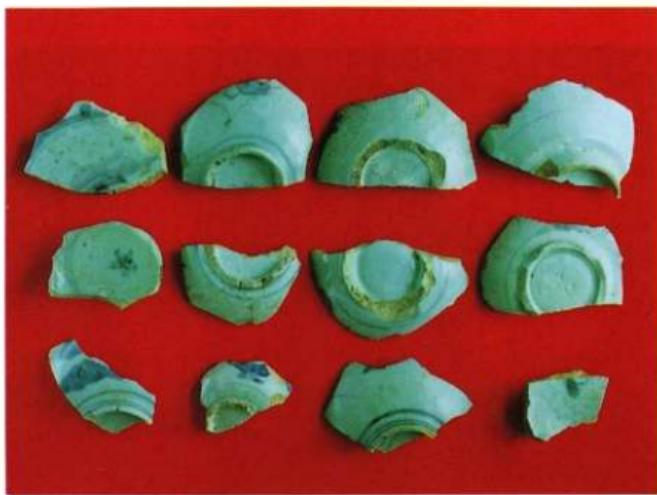
畦畔断面



木杭検出状況



陶磁器碗・小皿(肥前)



陶磁器碗(底部)



火入(肥前)



瀬戸系陶磁器



陶器碗・大皿(唐津)

図版5



輸入陶磁器  
(青磁・白磁)



関西系陶器



型紙刷  
碗・皿

図版6



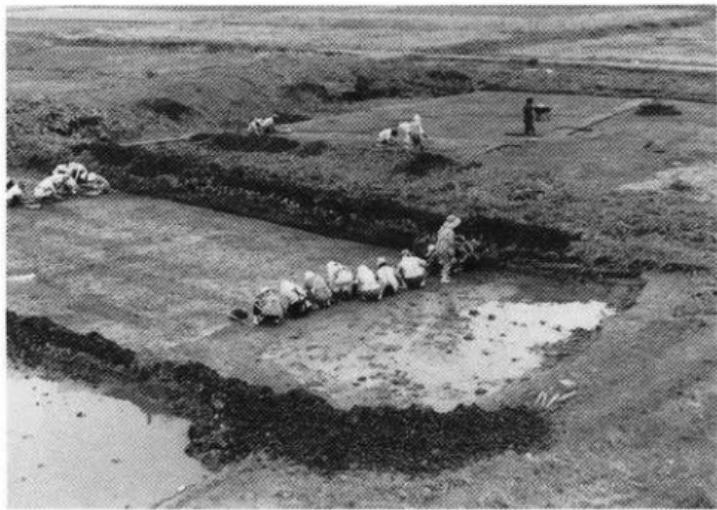
旧石器(ナイフ・剝片等)



獸骨



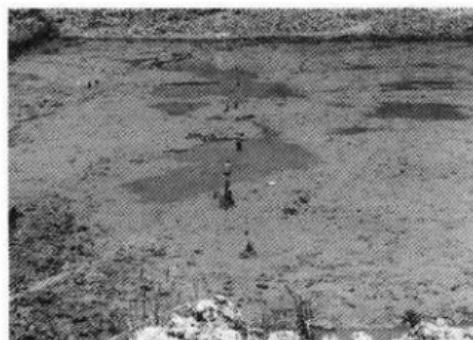
水田面調査区全景



水田面 G 区

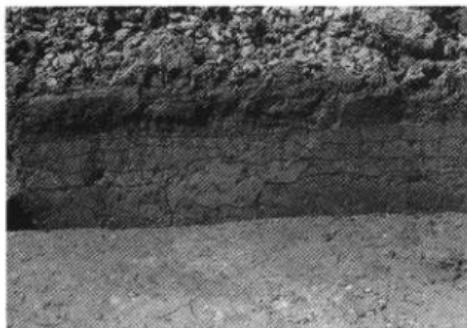


水田面B、C区



B区，木杭检出状况





畦畔断面



H区畦畔交差部土层断面

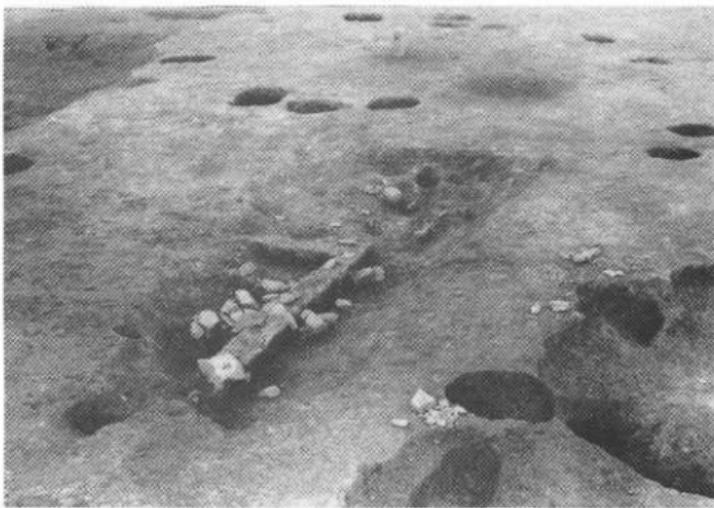


畦畔断面

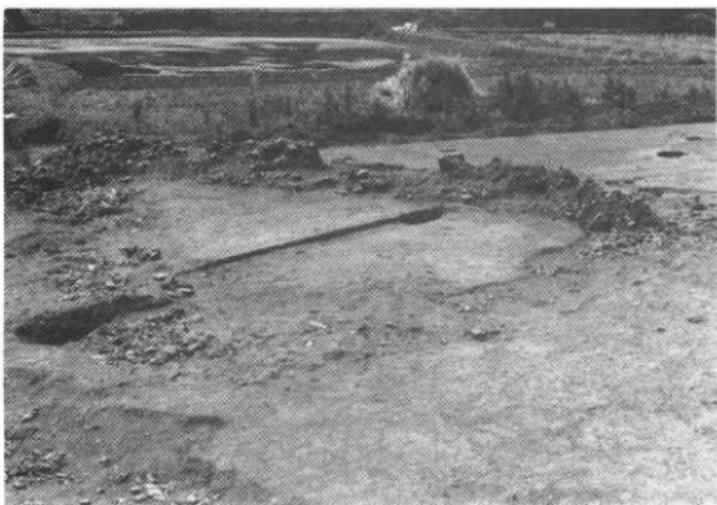
圖版10



石積列周辺精査状況



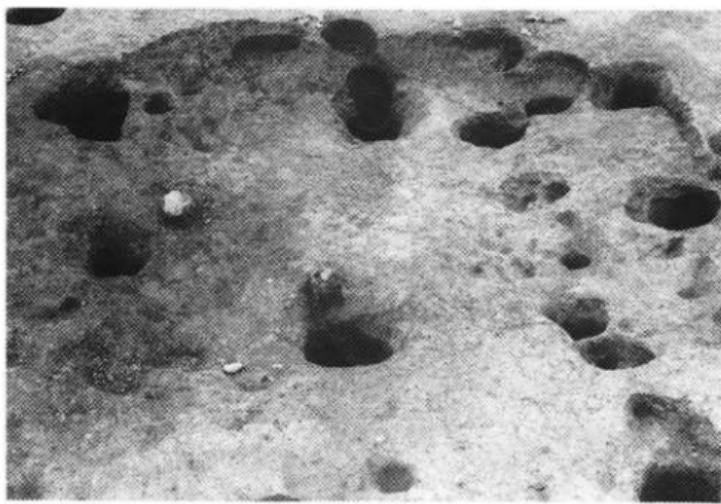
1号土墳



石積列の検出状況



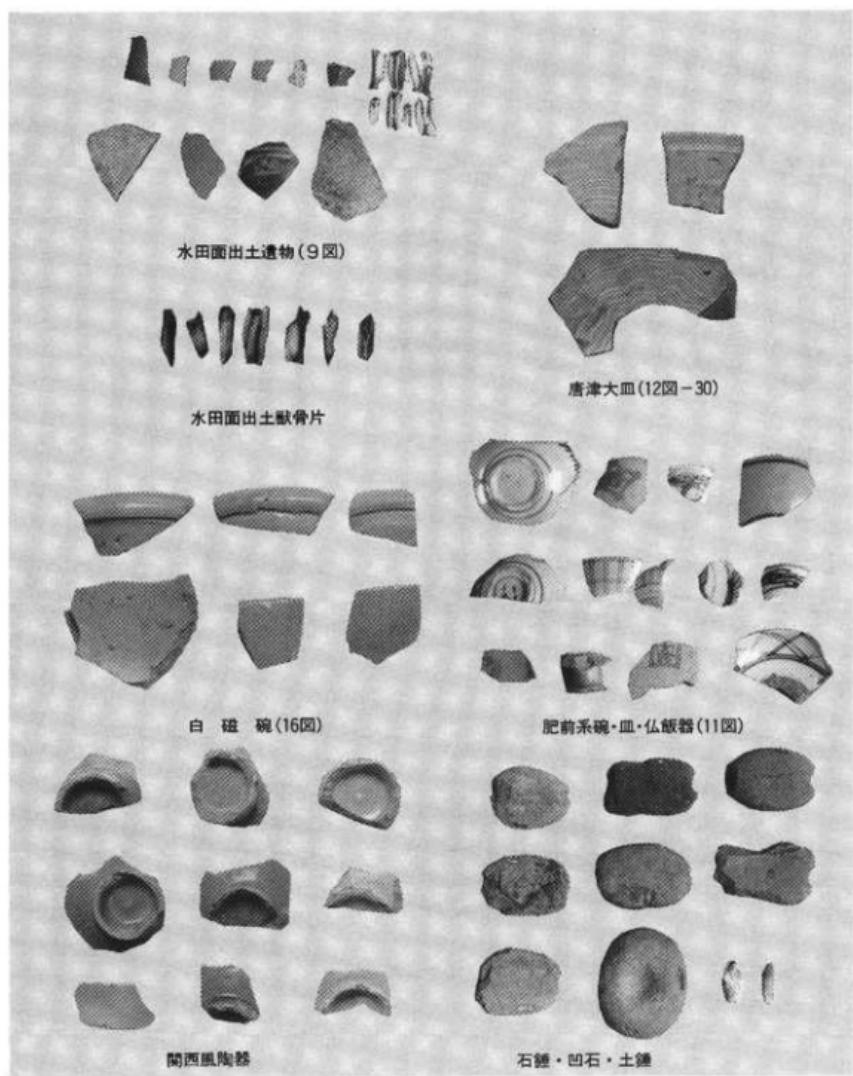
同上

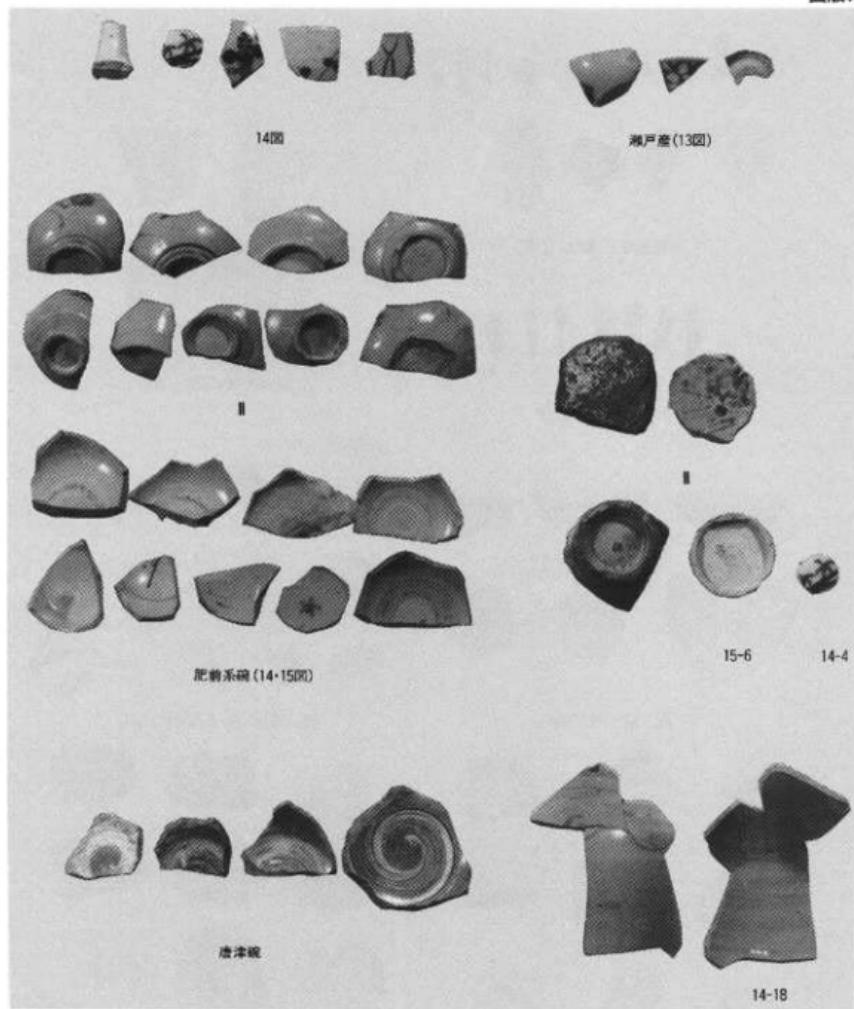


2号竪穴住居

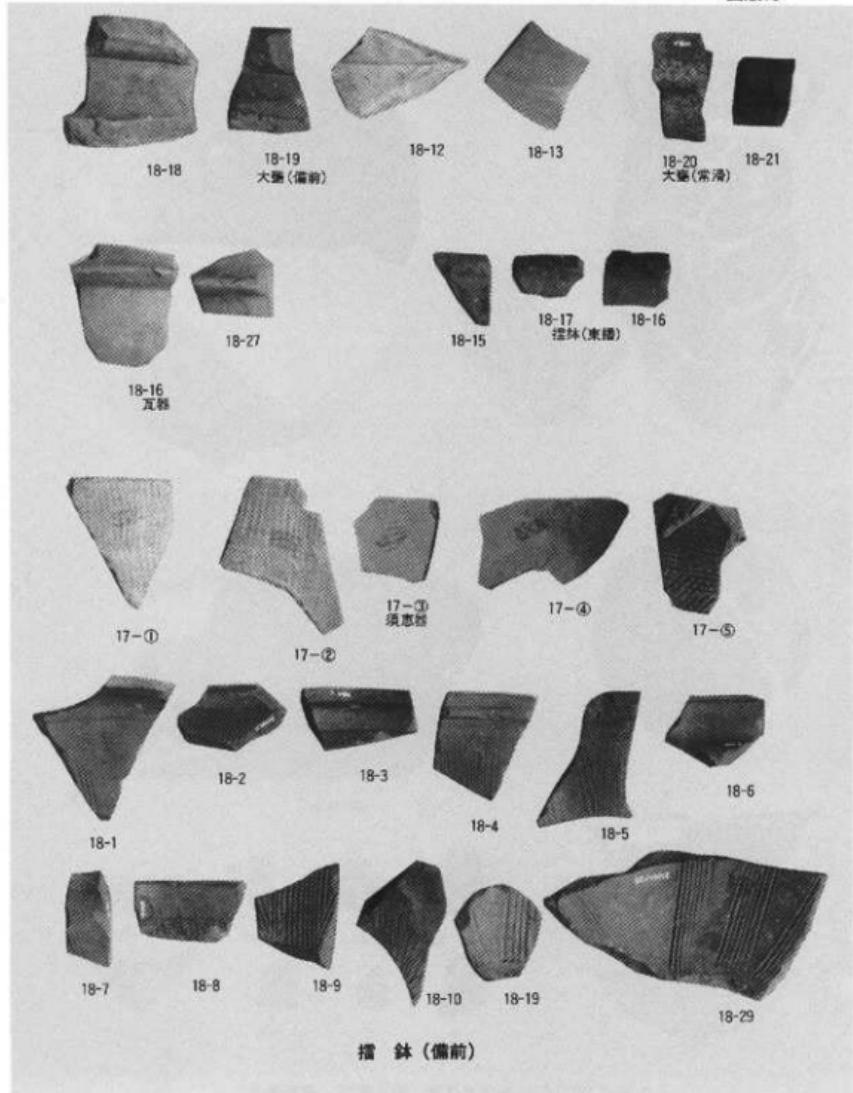


1号竪穴住居出土土器核出状况

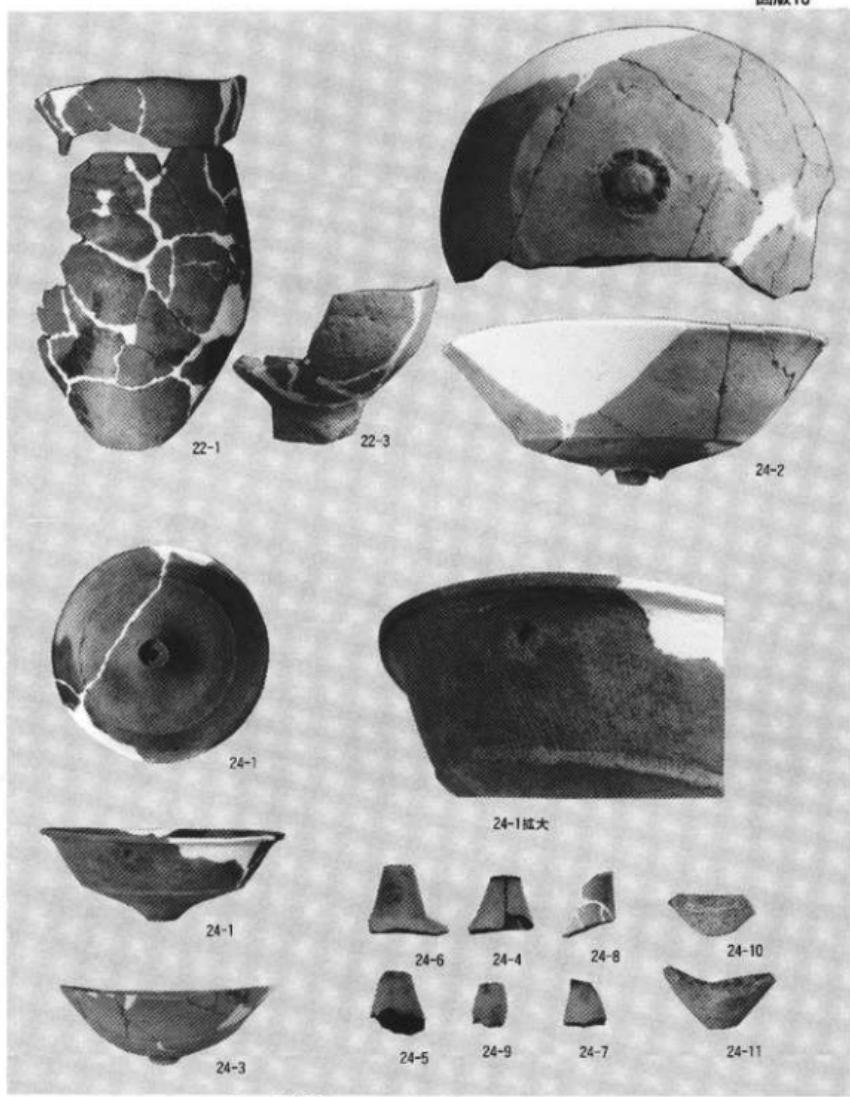




圖版15

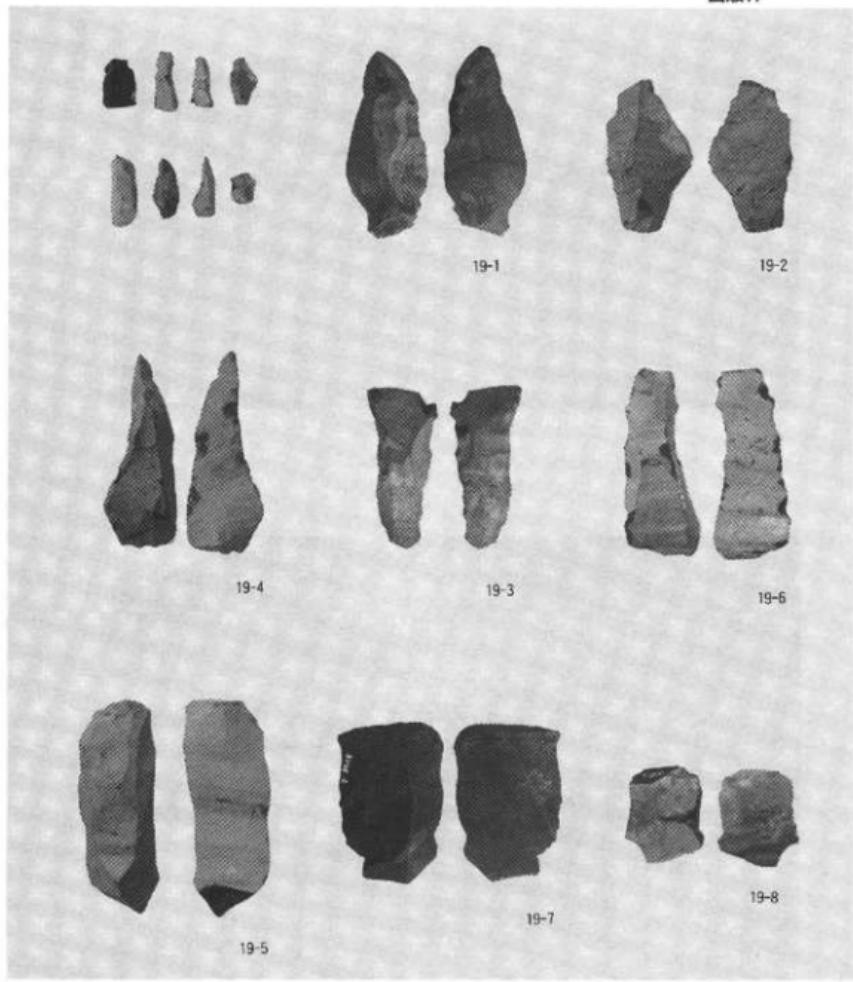


图版16



一号·二号竖穴住居出土遗物 (图面番号—遺物番号)

図版17



林遺跡出土旧石器(図面番号—遺物番号)



2次調査 遠景（北から）



掘立柱建物跡検出状態（東南から）



2次調査 挖立柱建物跡検出状態（東から）



2次調査 挖立柱建物跡検出状態（南から）



2次調査 A地区調査区



2次調査 焼石検出状態



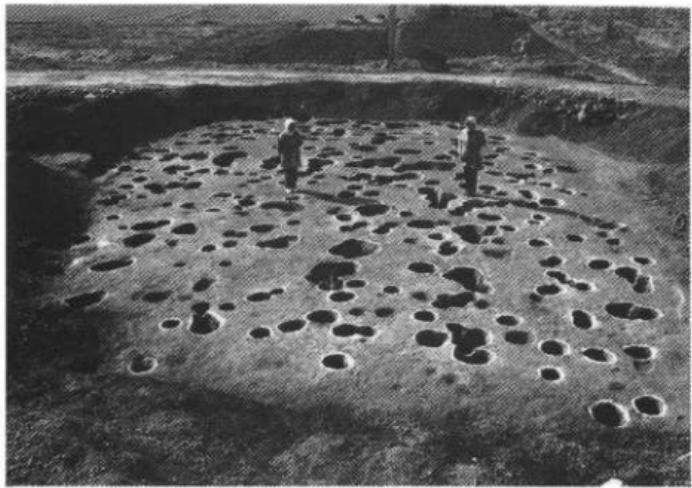
3次調査 B地区調査区



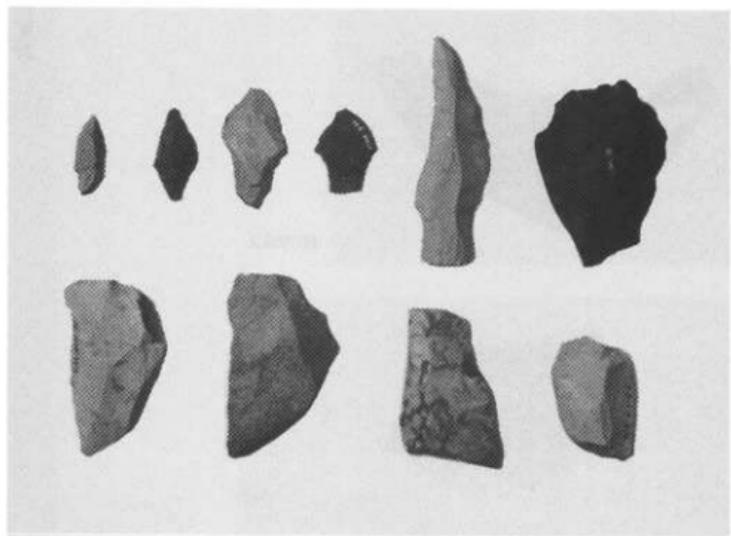
3次調査 A地区調査区



3次調査 挖立柱建物跡検出状態

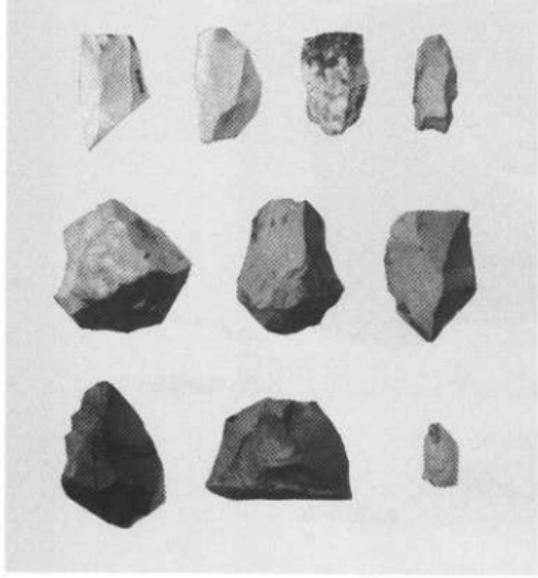


3次調査 挖立柱建物跡検出状態

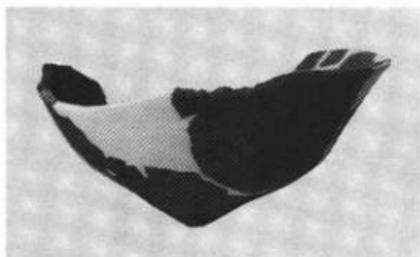


旧石器

第37図.1~10



第38図 1~10



第39図2



第39図6・7



第39図4・5



第40図 1~16



第40図 17~22・24~26



第41図 1~13



第40図23・27~31



## 林 遺 跡

一般国道10号土々呂バイパス建設工事にともなう  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成2年3月31日

編 集 宮崎県教育庁文化課

発 行 宮崎県教育委員会